

かく、世祖は、力を外征に用ゐて、能く其の版圖を擴めしのみならず、又、意を内治に留め、支那の舊制を參酌して、新に諸制度を定めたり。是より先、太祖太宗の時、耶律楚材を任用し、稍法制を定めたりと雖、當時、外征に急にして、未、力を内治に盡す能はざりしが、世祖の時に至り、漢人許衡、姚樞、劉秉忠の如き學者を任用し、新に官制を定め、中央に中書省、樞密院、御史臺を置きて、軍國の事を統べしめ、長官には、必、蒙古人を用ゐしが、次官以下に至りては、内外人種の異同を問はず、廣く人材を登庸せり。有名なる伊太利人マルコポーロが來り仕へたるも、當に此の時にありとす。世祖は、又、文學を獎勵し、西藏の僧八思巴を寵用して、帝師となし、蒙古文字を作らしむ。殊に喇嘛教を信じて、僧徒を寵遇せしより、其の後、僧徒驕傲の弊を生じ、これがために、元室の衰亂を招くに至れり。

第九章 海都の興亡 元代の治亂 欽察察合

台伊兒三汗國の盛衰

海都汗の叛亂

世祖が東南の經略に従事せる間に、西北に海都汗の叛亂起りて蒙古大帝國の分裂を促すに至れり。初、憲宗が蒙古の大汗となるや、窩濶台汗の諸王は、常に不平を抱きしが、世祖の位に即くに當り、蒙古の常例たる大會議の撰舉に據らざりしかば、窩濶台汗の諸王は、これを否認し、中にも海都の如きは、主として兵を擧げ、阿里不哥を助けて世祖に抗したり。阿里不哥破るゝに及び、迤米里に退きしが、世祖の東南を經營せる間に、窩濶台汗、欽察汗の諸王を誘うて叛旗を翻せり。世祖よりて、察合台の曾孫八刺を察合台汗となし、拔都の孫蒙哥帖木兒を欽察汗となし、以て海都に備へむとせしが、八

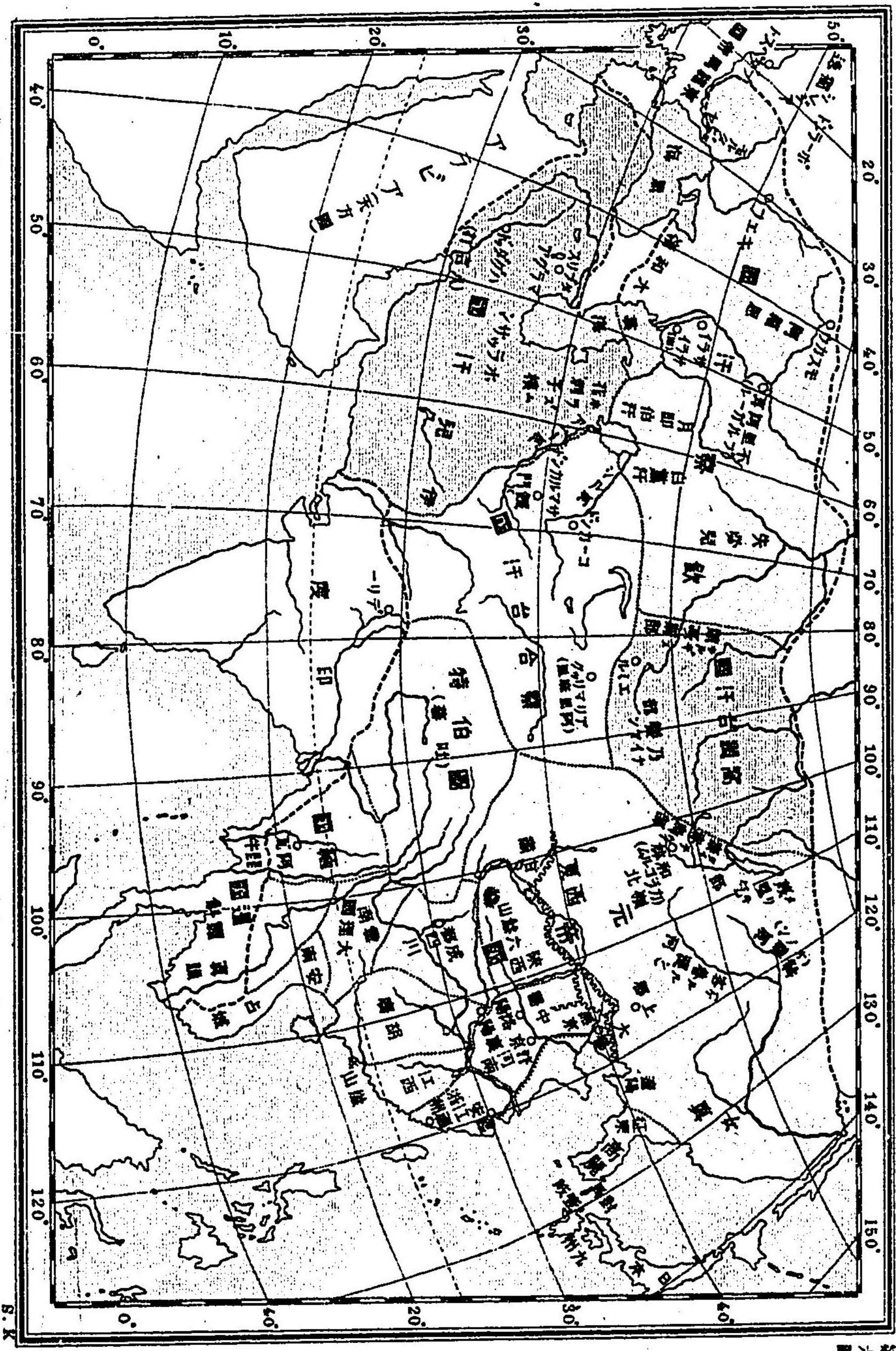
刺は、海都と親しきが故に、反つて海都と連和し、蒙哥帖木兒も亦、海都和を結び、欽察察合台窩濶台の三汗國は、共に同盟して大會議を開き、海都を推して、蒙古の大汗となせり。獨伊兒汗阿八哈は、世祖の弟旭烈兀の子なるのみならず、欽察汗と常に宗教上相容れざりしかば、元に與みせしが、其の歿するに及びて、國內亂れて、復、海都に抗する者なし。既にして八刺亦、死せしかば、海都は、其の子都哇を擁立して、察合台汗となし、兵を合せてカラコルムを犯す。太祖諸弟の後裔の滿洲にあるもの亦、これに應じて、世祖を夾擊せむとす。世祖乃、伯顔をカラコルムに遣りて、海都を拒がしめ、自將として滿洲を平定せしかば、海都は、戦はずして西に走れり。既にして世祖崩じて、成宗位に即くや、海都、また屢、入寇せしが、成宗の甥、海山に破られ、海都も亦、尋いて死せしかば、兩國の諸王は、

元室衰亡の要因

皆引き還れり。後、武宗（海山）の時、察八兒（窩闊台汗）窩闊台汗となり、元に叛きしが、戦破れて、窩闊台汗國遂に滅ぶ。

海都の叛せしより、是に至るまで四十年、大に元の國力を損耗せしのみならず、宗族の結合も、亦、是より解體を生ずるに至れり。かく、蒙古の大帝國は、内亂のために、次第に衰運に赴けるのみならず、他に種々の事情ありて、其の衰亡を速からしめたり。蓋、元は、世祖以來、連年兵を用ゐて、大に國帑を消盡し、加ふるに、世祖一たび喇嘛教を信ぜしより、歴代の帝王、皇妃、皆帝師に就きて佛戒を受け、佛事供養を力めしが故に、國帑の缺乏、更に甚しく、遂に交鈔を濫發して、一時の急を彌縫せしより、財政、全く紊亂し、或は外國貿易を官業となし、或は鹽鐵の税を増し、より、益、人民の怨を招きたり。且、蒙古の相續法は、必しも、父子の世襲を認めざるが故に、帝位相續の

蒙古帝國の地圖

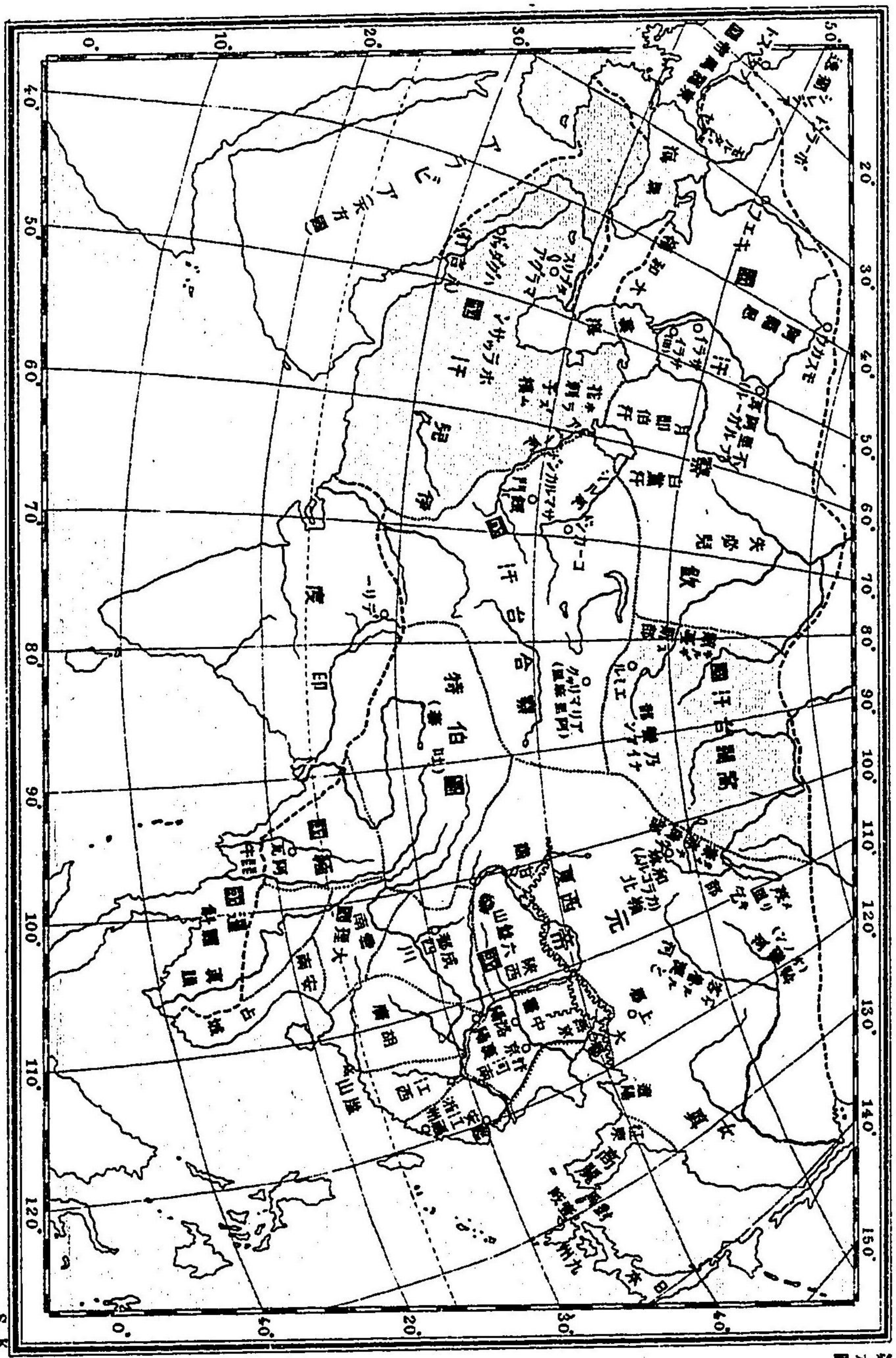


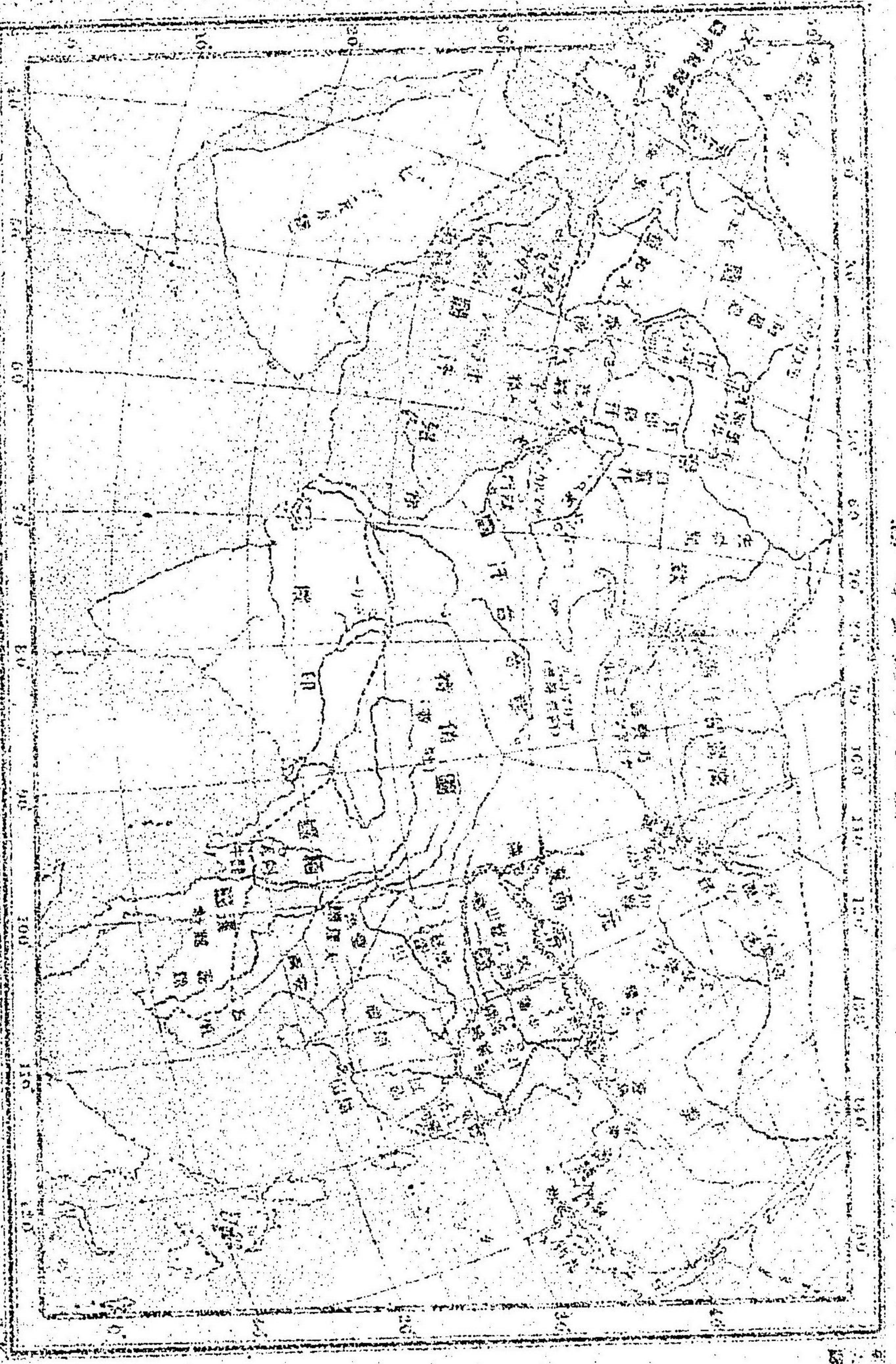
元室衰亡の源因

皆引き還れり。後、武宗山海の時、察八兒窩濶台汗となり、元に叛きしが、戦破れて、窩濶台汗國、遂に滅ぶ。

海都の叛せしより、是に至るまで四十年、大に元の國力を損耗せしのみならず、宗族の結合も、亦、是より解體を生ずるに至れり。かく、蒙古の大帝國は、内亂のために、次第に衰運に赴けるのみならず、他に種々の事情ありて、其の衰亡を速からしめたり。蓋、元は、世祖以來、連年兵を用ゐて、大に國帑を消盡し、加ふるに、世祖一たび喇嘛教を信ぜしより、歴代の帝王、皇妃、皆帝師に就きて佛戒を受け、佛事供養を力めしが故に、國帑の缺乏、更に甚しく、遂に交鈔を濫發して、一時の急を彌縫せしより、財政、全く紊亂し、或は外國貿易を官業となし、或は鹽鐵の税を増し、より、益、人民の怨を招きたり。且、蒙古の相續法は、必しも、父子の世襲を認めざるが故に、帝位相續の

蒙古帝國地圖





元朝の疆域

群雄の蜂起

元室の滅亡

太祖の統

際には、常に紛争を招き、奸臣、これに乗じて擁立の權を專にし、篡奪の禍相踵げり。かくて、元室の失政は益々漢族敵愾の氣を鼓舞しければ、順帝の時に及びて、天下全く亂れ、豪傑の囂起して亂を唱ふるもの前後相踵げり、其の最著れたるものを張士誠、陳友諒、方國珍、朱元璋となす。中にも朱元璋は、其の勢獨盛にして、金陵に據りて都となし、陳友諒、張士誠、方國珍等を討滅して、江南の諸州を定め、尋いて部將を遣はして燕京に迫らしむ。元軍、連に破れ、順帝は出奔せり。世祖より是に至るまで、十世八十八年にして、元遂に亡ぶ。(皇紀二〇二八年) 朱元璋、金陵に於いて帝位に即く。是を明の太祖となす。

第十章 明の初世

明の太祖朱元璋、位に即くの時、に當り、元の順帝は、尙上都

明太祖廟前石人圖



太祖の政

太祖の失

に據り、所在の豪傑、尙帝號を稱せるものありしが、太祖は、徐達、常遇春の二良將を北方に遣りて、順帝を追躡せしめ、又、兵を四川、雲南、貴州の方面に用ゐて、元の遺族、若くは豪族の割據せるものを征服して、全く天下を平定せり。是より、意を政治に用ゐ、外は邊要の地に、行都指揮使司を置き、國防を嚴にし、内は律令を改修して、蒙古の遺風を去り、唐代の衣冠を復し、兵權を朝廷に收め、政務を六尙書に分ちて、國務を分擔せしめ、以て丞相專横の弊を防ぎ、學校を天下に設けて、教化を布けり。然れども、宋元二朝の孤立にして、亡びたるに懲り、諸皇子を要地に分封して、帝室の藩屏となし、特に邊要の諸王に限り、兵馬の權を用ゐることを許し、かば、漸尾大掉はざるの勢をなすに至れり。これに加ふるに、太祖は、其の功臣の、後に非望を覲覲するを恐れ、大獄を起して、これを芟鋤せ

明太祖席前石人圖



太祖の政

に據り、所在の豪傑、尙帝號を稱せるものありしが、太祖は、徐達、常遇春の二良將を北方に遣りて、順帝を追躡せしめ、又、兵を四川、雲南、貴州の方面に用ゐて、元の遺族、若くは豪族の割據せるものを征服して、全く天下を平定せり。是より、意を政治に用ゐ、外は邊要の地に、行都指揮使司を置き、國防を嚴にし、内は律令を改修して、蒙古の遺風を去り、唐代の衣冠を復し、兵權を朝廷に收め、政務を六尚書に分ちて、國務を分擔せしめ、以て、丞相專横の弊を防ぎ、學校を天下に設けて、教化を布けり。然れども、宋元二朝の孤立にして、亡びたるに懲り、諸皇子を要地に分封して、帝室の藩屏となし、特に邊要の諸王に限り、兵馬の權を用ゐることを許し、かば、漸尾大掉はざるの勢をなすに至れり。これに加ふるに、太祖は、其の功臣の、後に非望を覬覦するを恐れ、大獄を起して、これを芟鋤せ

しかば、宿將老臣の能く宗室を輔弼するものなきに至れり。太祖崩じて孫惠帝立つに及び、諸王の強大を恐れ、黃子澄等の言を用ゐ、漢七國削平の故智を學び、漸これを抑壓せしかば、諸王自ら安せず、惠帝の叔父なる燕王棧は、是より先、燕京に據り、夙に威望ありしが、是に至り、黃子澄等を誅するを以て名となし、兵を擧げて南侵し、長驅して金陵に逼る。帝、方孝孺の議を用ゐ、地を割きて和を請ひしも、燕王聽かずして金陵遂に陥り、惠帝出奔して其の終る所を知らず。燕王自立して帝位に即く。これを成祖となす。

成祖、逆に得て順に守り、心を政治に用ゐ、師を外に出して大に國威を發揚せり。是より先、元の順帝は、太祖に破られて北に走り、其の遺族カエ、コルムに據りて、なほ明に抗せしが、其の後、内亂の爲に國勢衰へ、鬼力赤といふもの篡立して、韃

安南の叛亂

百三十六
鞞可汗と稱せしが、其の臣阿魯台これを弑し、元の皇族本雅矢里を迎へて可汗となし、なほ明に抗せしかば、成祖親ら征して大に鞞可汗の軍を斃難河畔に破りぬ。然れども、其の後、侵犯尙止まざりければ、成祖は都を燕京に移して之を拒げり。此の頃、安南は黎季犛立して陳氏に代り、國を大虞と號せり。陳氏の裔天平、明に入りて哀を請ふ。成祖よりてこれを安南に納れしむ。然るに、季犛これを殺せしかば、成祖はこれを怒り、大兵を發して南征せしめ、大に安南の軍を破り、季犛を禽にし、安南に交趾布政司を置きてこれを治めしむ。其の後、明は陳氏の後を立てざるのみならず、施政亦悪かりしかば、黎利といふもの、陳氏の後を奉じて義兵を擧げ、明の軍を破り、尋いて自立して大越皇帝と稱せり。成祖の孫、宣宗の時に至り、遂に黎利を安南王に封じて、和を結べり。安南の征服

察合台汗國の衰頹

せられしより、明の威勢南海に加はり、琉球、真臘、暹羅等の諸國明に貢するに至れり。

第十一章 帖木兒大王の兼併

元の滅亡すると同時に、察合台、伊兒、欽察の三汗國も、其の勢衰ふるに至れり。

察合台汗國は、都哇の後、世先不花、察合台汗となりしが、伊兒汗のために破られ、國威俄に衰頹し、加之、其の後嗣者、大率暴虐にして、内亂絶えざりければ、察合台汗國は、全く分崩するに至れり。是の時に當りて、蓋世の豪傑の蒙古の一疎族より出でて、亞細亞の大半を併吞するものあり。これを帖木兒となす。

帖木兒は、元の順宗の初年を以て、サマルカンドに生れ、長

起 帖木兒の

伊兒汗國
の滅亡

じて察合台汗の參謀となりしが、議合はずして去り、察合台汗國の衰亂に乘じ、悉く中央亞細亞を占領し、都をサマルカンドに奠め、尋いで、悉く察合台汗國を平定し、兵を西に出し、更に伊兒汗國を襲へり。

是より先、伊兒汗國は、旭烈兀の後數世を経て、合贊に至り、内は憲法を制定して國政を改良し、外は羅馬法王と同盟して十字軍に加はり、埃及を破りしが、後勢漸く衰へ、アームツトの時に至り、帖木兒に併吞せられたり。

かくて、帖木兒は、察合台伊兒の二汗國を併せ、勢ますます強大となり、遂に欽察汗國と境を接するに至れり。

是より先、欽察汗國は、其の祖拔都の子蒙哥帖木兒の時、其の勢盛にして、一時歐亞の二洲を震懾せしめしが、其の後、爭亂相繼ぎ、白黨、月即伯、哥里米の三汗、各欽察汗たらんとして

欽察汗國
の盛衰

相爭ひ、阿羅思これに乗じて叛亂せしかば、國勢全く衰頽せり。是の時に當り、帖木兒は、兵を率ゐて、此の國に侵入し、哥里米汗トグタミ、シユを援けて、これを欽察汗となす。トグタミ、シユ、是より勢を得、兵を西に出して、阿羅思に侵入し、莫斯科を燒きて、諸侯を威服し、鋒を轉じて、帖木兒の領土を犯す。帖木兒これを怒り、兵を率ゐて、ウラル河を渡り、欽察の軍をウナルガ河畔に破り、長驅して、阿羅思に入り、莫斯科を奪取し、遂に欽察汗國を平定し、白黨汗の子を立て、欽察汗となし、其の地を治めしむ。

帖木兒の
印度征服

帖木兒、既に西北方の經畧を終りければ、是より鋒を轉じて、印度に侵入せり。是より先、印度はクタブウチンといふもの、デリーに都して、謂はゆる奴隸王朝を始めしが、成吉思汗の西征以後、まばく、蒙古の侵害を受けて衰微し、遂にチエ

ラルウ、チンに滅さる。ヂエラルウ、チンの子をアラウウ、ヂンといふ、殆、全印度を一統せしが、其の没するに及び、其の將ギヤスウ、チン代り立ち、トグラ、ク朝を興す。然れども、其の子モハメドに至り、國勢頗る衰頽せり。此の時に當り、帖木兒は大兵を率ゐて印度に侵入し、デリーを陥れ、進みて恒河に至りしが、會、阿斯曼帝のバシヤセツトが、其の虚を襲はんとするの報を得て、直に軍を班して、これに向へり。

阿斯曼帝
國の起

阿斯曼帝國は、突厥族によりて立てらる。突厥族は、隋唐の比、中央亞細亞に雄威を振ひしが、其の後、成吉思汗に追はれて、小亞細亞に入れり。阿斯曼といふもの出づるに及び、小亞細亞の地を畧して、阿斯曼帝國を建設せり。即今の土耳其帝國、是なり。其の子バシヤセツト嗣ぎて立ち、希臘を征し、大に東羅馬帝國を侵畧して、地を西に畧し、又埃及の支丹ズンと通じ

ア
ン
ゴ
ラ
の
戦

て、帖木兒を夾撃して、地を東に擴めんとせしかば、帖木兒はこれを聞き、直に印度より還り、シリアに入りて埃及兵を破り、バシヤセツトと小亞細亞のアンゴラに戦ひて、これを禽にし、悉、小亞細亞の地を定めぬ。是れに於いて、帖木兒は、蒙古の恢復と、回教の傳播とを口實とし、明を滅ぼして、世界を統一せんとし、大に東征の軍を起し、が途にして疾を獲て死せり。(皇紀二〇六五年、西紀一四〇五年)帖木兒の死後、内難起り、其の大版圖は瓦解したりしが、其の後裔パールに至り、遂に印度に侵入して、帝國を建つるに至れり。其の事は、猶、後章に至り、これを説くべし。

第十二章 明の中世

蒙古の地方は、成祖の時、既に征服せられしが、成祖死して

英宗立つに及び、瓦剌の部長に脱歡といふ者あり、韃靼の部長阿魯台を殺して、其の地を併せ、別に元の宗室脱々不花を立て、韃靼可汗となし、己其の將となりて、頗る權勢を弄せしが、其の子也先に至り、次第に傍近の地を略し、勢益強大となり、遂に明に入寇せり。皇紀二一〇九年時、明には英宗位にあり、宦者王振に聽き、親征して、土木直隸省宣化府に至りしが、大敗し、虜となり、瓦剌の兵進みて、北京に逼る。城中震駭して、南遷を言ふものありしが、于謙等、英宗の弟景帝を擁立して、固守せしかば、也先遂に圍を解きて去り、英宗を送還せり。其の後、瓦剌は、内亂の爲に勢衰へしかば、明の邊境は、暫無事を保つを得たり。英宗還るに及び、父子相和せず、已にして景帝病に罹りしかば、石亨これを機とし、宦者曹吉祥と謀り、英宗を復位せしむ。宦官の權を專にすること、これより始まる。其の

土木の變

大禮の議

後、憲宗、孝宗を経て、武宗に至り、帝崩じて嗣なし。是に於いて、孝宗の弟興獻王の子を迎立す。世宗、是なり。尙書毛澄、漢宋の故事により、皇親の尊號を議す。大禮の議、是より起り、廷臣の論争久しく續きしが、遂に席書等の議によりて、始めて尊稱を定むるに至れり。

安南の盛衰

韃靼の入寇

土木の變後、瓦剌部は内亂のために、其の國勢全く衰へしが、これに反して、韃靼部は、其の勢漸く盛となり、世宗の時に當り、達延可汗の出づるに及び、韃靼の諸部を統一し、其の孫ト赤に至り、勢ますます熾にして、遂に明を犯すに至れり。然れども、後、兵を厭ひて、東方に移り、其の族俺答これに代り、また、屢明の邊境を犯し、が、穆宗の時に至り、始めて款を明に通じ、其の封冊を受けしかば、北方の邊患、漸く止みたり。是より先、安南は、黎利太祖より三傳して、黎顯の時に至り、

内は民治を力め、外は征伐を行ひ、占城、雲南、緬甸の諸地を略し、中興の英主と稱せられしが、其の後、庸主相繼ぎて位に即き、國威ますく、衰退し、莫登庸といふもの、篡立して王位に即けり。是に於いて、國人阮徑といふもの、黎氏の一族を奉じて主となし、援を明に請へり。世宗、由りて兵を發して、これを討せんとせしが、更に登庸の罪を赦し、其の孫福源をして安南を治めしむ。皇紀二五〇〇年是より、黎氏、莫氏の二氏、南北に相争ひ、其の紛亂久しきに亘れり。

第十三章 倭寇 明の末世

倭寇

忽必烈の東征後、日本と元との交通は、たゞ商估僧徒の私に通ずるのみなりしが、元の末より、我が西南諸國の豪族流民は相合して、高麗及び元の沿海を攻掠せり。これを倭寇と

勘合符

いふ。明初に至り、其の患ますく、甚しく、北は山東より、南は浙江、福建に至る迄、歳として其の害を蒙らざるはなし。太祖よりて使を我が邦に遣はして、邊寇を禁ぜんと請ひしも、其の効なく、沿海各地に防倭衛所を設けて、これが防禦に力めたり。成祖の世に至り、我が邦は、南北始めて一統に歸し、將軍足利義滿は、使を明に遣はして、これと隣交を修め、尋いて、宣宗は、勘合符の制を定めて、貿易の道を開きしかば、爾後、我が邦の諸侯も、足利氏と共に、各自、明に通じて、貿易に従事せしかば、邊海は、一時、小康を得しが、幾もなくして、我が邦には、應仁の大亂起り、尋いて、戰國擾亂の世となり、四方不逞の徒、變じて、沿海の寇盜となり、其の徒多きは數千、少なきも數百、海上を横行し、沿海の州縣を侵畧し、人を殺し、火を放ち、剽掠至らざるなし。既にして、明の叛民も亦これに加はり、これを導

きて沿海の地を攻畧せしかば、倭寇の勢ますます猖獗を極むるに至れり。世宗の時、明將俞大猷、これを撃破せしより、其の勢俄に衰へしが、餘孽なほ臺灣に據りて、明の南海に出没せり。

高麗は、嘗て元の東藩なりしが、其の東侵に與かりて、大に國帑を盡し、爾後、内亂相繼ぎ、加ふるに倭寇の侵犯もまた甚しかりければ、國力ますます衰退し、恭讓王の時に至り、其の臣李成桂、篡立して王位に即き、明の冊封を受け、國號を改めて朝鮮と號す。即、太祖是なり。太祖八世の孫李昭の世に當り、我が邦は、豊臣秀吉の方に國內を一統せるの時に當りければ、秀吉は、朝鮮の來貢を促し、且、明を伐つゝの嚮導をなさしめんとせしに、其の命を拒みしかば、秀吉は、すなはち大軍を發して朝鮮を征し、八道大率これがために蹂躪せられたり。皇紀

二五二年西紀一五九二年こゝに於いて、李昭は、援を明に請ひしかば、神宗は直に其の請を容れ、大軍を派してこれを救ひしが、連戦みな破らる。神宗、大にこれを懼れ、遂に沈惟敬をして和を請はしむ。去かるに、その璽書禮なく、條約も秀吉の意に副はざるを以て、秀吉はこれを斥け、再征の師を出し、が、交戦歳餘にして、秀吉病みて薨じ、我が諸將引き歸りしかば、李昭は、漸く京城に歸るを得たり。其の後、我が徳川氏の時に至り、朝鮮は、更に我が邦と好を修め、爾後、將軍の禪代毎に、我が國に來聘せり。

神宗の頃より、明の威勢漸く衰へ、朝鮮の役に次ぎて、更に滿洲人の東境を侵食するあり。此の時に當りて、朝廷には東林の黨議起りて、政治愈亂れたり。初、顧憲成といふもの事を以て、神宗に黜けられしが、郷里に歸りて、學を東林書院に講

じ同志を集めて時世を諷議す。天下の學者これに附くもの多く、おのづから一大民黨となれり。是に於いて、廷臣は其の徒を目して、東林黨と稱し、其の排斥に力めて、軌轢ますく甚し。偶、狂人太子の門者を挺撃せるあり、次いで、神宗の子光宗、紅丸を服して、俄に崩じ、其の寵妃李選侍、熹宗を擁立す。執政、其の國政に干涉するを恐れて、之を他官に移す。これを挺撃、紅丸移宮の三案といふ。是に於て、東林黨は、此の三案を論難して、已まず。時に東林黨の葉向高、相となり、其の黨を任用せしかば、東林黨は益盛なりしが、幾もなくして、帝は、宦者魏忠賢を信任し、東林黨を抑壓して、正義の士を黜け、れば、朝政、甚だ紊亂せり。熹宗崩じ、思宗立つに及び、政道全く廢れ、李自成、張獻忠の徒、遂に亂を起し、其の勢猖獗にして、忽、河南を定め、山西を取り、遂に北京を陥れしかば、思宗自殺して、明遂

三案の蹟

亡 明室の滅

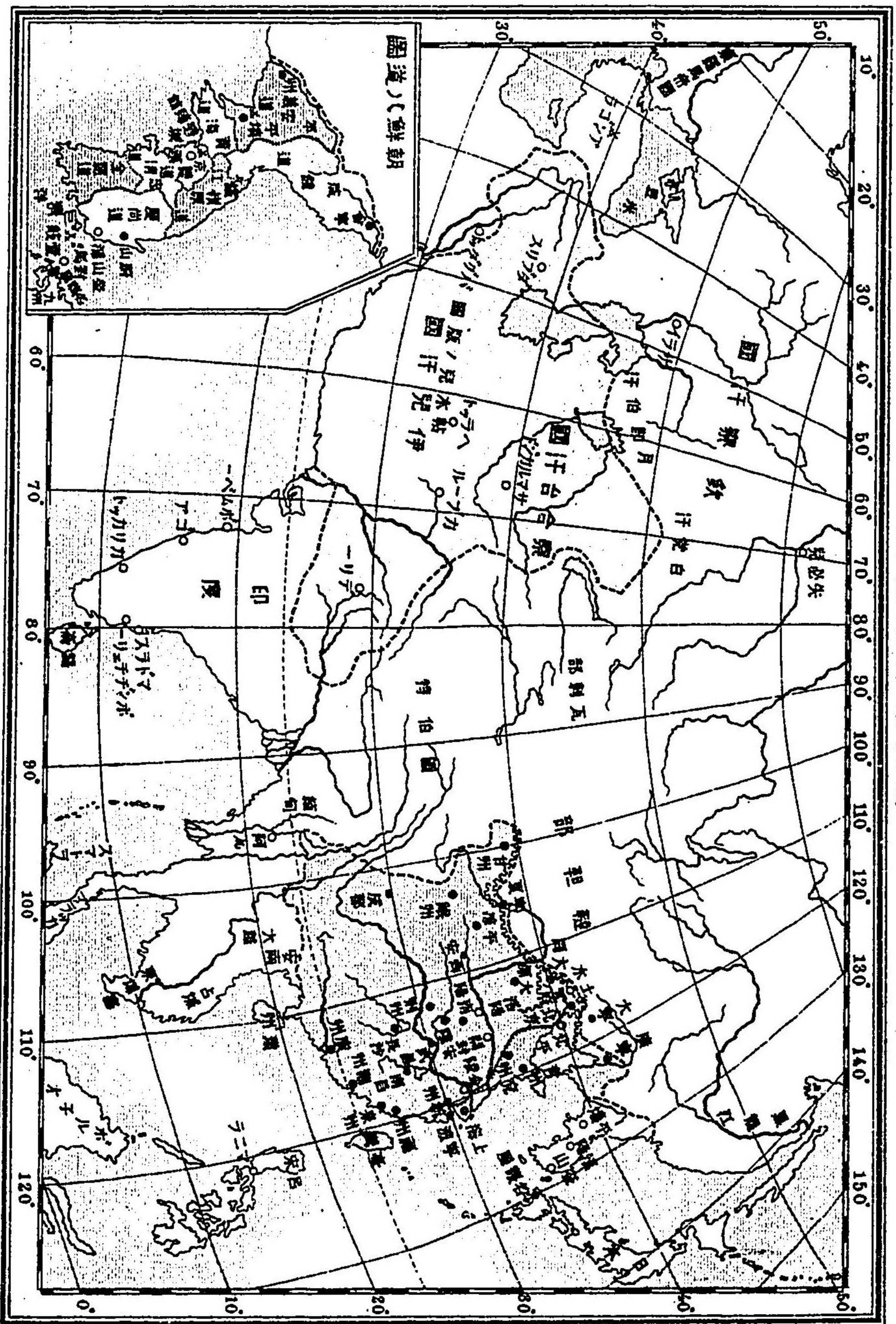


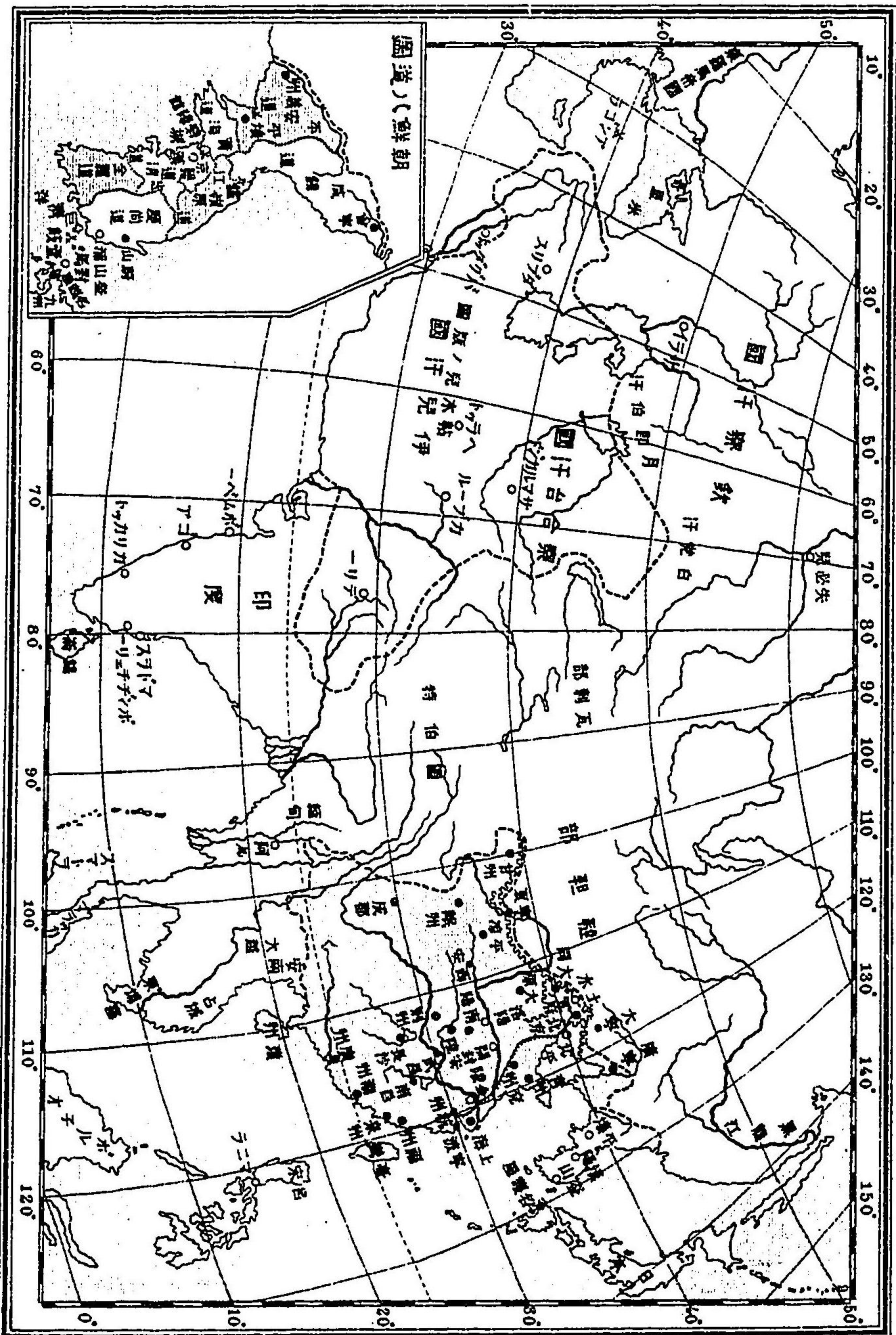
Figure 7 明代海洋圖

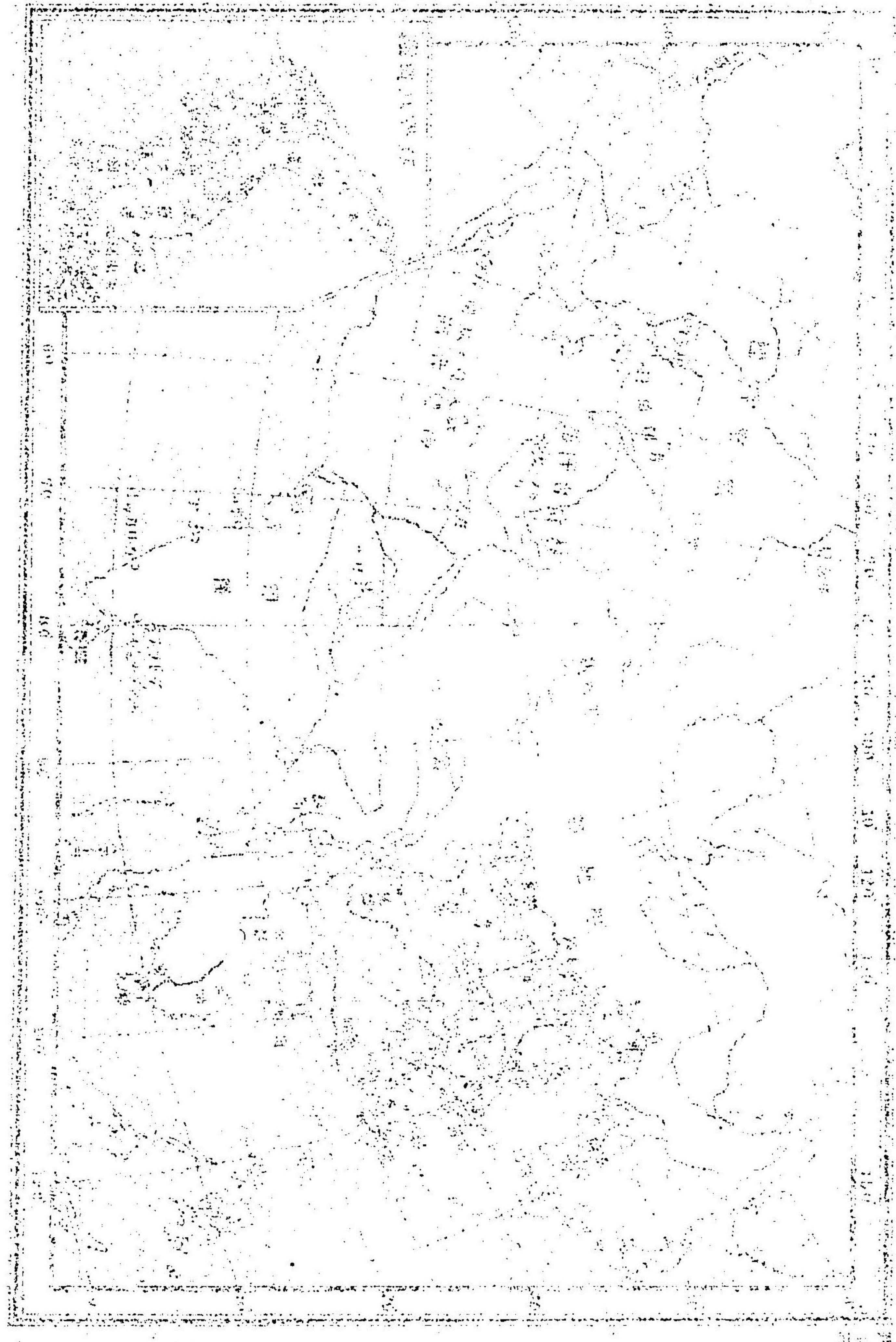
三案の蹟

じ同志を集めて時世を諷議す。天下の學者これに附くもの多く、おのづから一大民黨となれり。是に於いて、廷臣は、其の徒を目して、東林黨と稱し、其の排斥に力めて、軌轢ますく甚し。偶、狂人太子の門者を挺撃せるあり、次いで、神宗の子光宗、紅丸を服して俄に崩じ、其の寵妃李選侍、熹宗を擁立す。執政、其の國政に干涉するを恐れて、之を他宮に移す。これを挺撃、紅丸移宮の三案といふ。是に於て、東林黨は、此の三案を論難して已まず。時に東林黨の葉向高、相となり、其の黨を任用せしかば、東林黨は益盛なりしが、幾もなくして、帝は、宦者魏忠賢を信任し、東林黨を抑壓して、正義の士を黜け、れば、朝政、甚だ紊亂せり。熹宗崩じ、思宗立つに及び、政道全く廢れ、李自成、張獻忠の徒、遂に亂を起し、其の勢猖獗にして、忽、河南を定め、山西を取り、遂に北京を陥れしかば、思宗自殺して、明遂

亡 明室の滅

明代東洋諸國圖





に滅ぶ。太祖より此に至るまで二百七十七年にして亡びぬ。
(皇紀一三〇四年)然れども、明室の餘孽は、なほ南方にありて
虚號を稱せり。

第十四章 元明の儒學文藝及宗教

元の世祖の天下を統一するや、西藏僧八思巴に命じて蒙古文字を製せしめ、また、大に宋の遺賢を招集して儒學を起せり。姚樞、許衡、吳澄の如きは、其の著名なるものなり。詩文には見るに足るもの少なしといへども、戯曲小説は元代に至りて大成し、高則誠の琵琶記、王實甫の西廂記等、其の著名なるものとす。小説には施耐庵の作と稱せらるゝ水滸傳、其の結構文章共に勝れたり。畫には顔輝、書には趙孟頫を最著しとす。

元代の儒
學文藝

明は太祖頗る教化を重じ、京師には國子學、地方には府州縣學を設け、經學は一に程朱の説に據れり。薛瑄出づるに及び、益此の説を主張せり。其の河東に居るが故に、これを河東派と稱せり。後、王守仁(陽明)出づるに及び、陸象山に基づき、良知の説を唱ふ。これを姚江派といひ、一に王學派といふ。互に門戸を立て、相競ふに至れり。詩文には宋濂、方孝孺、李攀龍の徒あり。戯曲小説も亦盛にして、西遊記、金瓶梅の如き傑作出たり。書畫に亦妙手を出し、文徵明、最著る。元の時代は、成吉思汗の統一により、東西の交通開けしが故に、學術の如きも、必、其の影響を受けしならんも、未、これを詳にせず。明に至りては、傳教師の布教のために支那に至るもの多かりしが故に、科學の如きは、是等傳教師の力によりて進歩せるもの多かりき。中にも地理學、天文學は頗る發達し、アレンニ交備略の

職方外記、マテオ、リツチ、利瑪竇の萬國全圖、エマニエル、ヂン、ソ陽瑪諾の天文畧の如きは、蓋、支那に於ける歐洲科學の始なるべし。殊にマテオ、リツチの如きは、久しく明に滯留し、頗る漢文に通じ、神宗に任用せられて、欽天監となるに至れり。又、此の頃、本草學は頗る進歩し、李時珍の著に係る本草綱目は、長く東洋博物家の模範となれり。

第十五章 莫臥兒帝國の興亡

帖木兒の死後、中央亞細亞の地は紛擾を極めければ、拔都の弟昔班の後裔に出でたる月即伯汗、アブルケル出でて、帖木兒の玄孫なるアフメイドを助けて國難を靖んぜしが、其の孫シパンに至り、遂にカマルカンドを陥れ、中央亞細亞を占領して、布哈拉國を立て、又、其の族イルバルスは、花拉子摸

を占領して基華國を立てたり。西紀一五一七五年是に於いて、アブセイドの孫ハイベルは、父祖の遺業を復興せむとし、屢シバンと相攻争せしが、遂に破れて阿富汗に退くに至る。是の時に當りて、印度は、其の國勢頗衰微し、ラジャプト族四方に割據して相攻争せしかば、ハイベルは、これに乗じて、阿富汗より印度に侵入し、デリーを陥れ、莫臥兒帝國を創建して、北印度を統轄せり。皇紀二一八八年然れども、其の子フマール・ユン嗣ぐに及び、内亂起りしかば、フマール・ユンは、波斯に遁れ、其の援兵を得て、侵地を恢復し、再び印度に還りしが、幾もなぐして崩じ、其の子アクトバル嗣ぐに及び、悉、北中兩印度を征服して、都をアグラに定め、皇紀二二六〇年意を内治に用ゐ、財政、司法、兵備を整へ、文學を奨勵し、又、宗教の自由を許し、非回教徒税を廢せしかば、國內頗平穩を極めたりき。此の頃、印

度の南方にはアマツナガル等の回教國勢威を振ひしかば、帝は屢これを征し、遂に志を得ずして歿し、子孫相繼ぎて、其の征討に従事し、曾孫アラングセアの時に至り、始めて南印度を征服し、全印度を統一するに至れり。皇紀二二四〇年然れども、莫臥兒帝國は、此の頃より漸衰へ、波斯王アバス二世は、屢、阿富汗を犯し、印度河以西の地は、悉、其の有に歸するに至れり。これに加ふるに、帝は、回教を信じ、印度教徒を冷遇せしかば、ラヂャプト族の叛亂を企つるもの漸多く、南印度の印度教徒は、マールタ同盟を結びて、頑固なる抵抗をなすに至れり。帝の崩後、嗣王、大率庸劣なりければ、ラヂャプト種族は、所在に割據して、殆ど獨立の姿をなすに至れり。此の時に當りて、波斯は、アバス二世死してより、内亂起り、國勢衰微せしかば、阿富汗人ミルザアイスは、此の機に乗じ

て起り、其の子マームドに及び、イスバハンに都して波斯王
となる。皇紀一七三五年後幾ならずして、波斯人ナジル起り、
阿富汗人を破り、波斯王となり、進みて阿富汗に入り、遂に莫
臥兒帝國を侵せり。時に、莫臥兒帝は、ムハメッド、シヤ位にあ
りしが、これを防ぐ能はず、婚を通じて和を結べり。此の如く、
莫臥兒帝國は、内憂外患、存に臻りて、國力ますます衰退せり。
此の時に乗じて、歐羅巴人は、陸續印度に渡來して、更に其の
侵畧を企つるに至れり。

第十六章 葡萄牙西班牙の東畧 基督教
の東流

蒙古が、歐亞兩大陸に跨る大版圖を成してより、東西の交
通頻繁となり、以太利人マルコ・ポロの如き、みづから東遊

葡萄牙人の東畧

の旅行記を作りて、東亞の富饒を説きしかば、其の國人の東
洋に航するもの漸く多きに至れり。西紀一千四百年代に至
りては、歐洲諸國の形勢全く一變し、各國競うて新陸地の發
見拓殖に従事せしが、中にも葡萄牙、西班牙の二國の如きは、
主として印度に達するの航路を發見せんことを企て、遂に
葡萄牙人ヴァスコ・ダ・ガマの出づるに及び、其の目的を達し
ければ、是より葡萄牙人の東洋に航するもの漸多く、遂に臥
亞を奪略して、其の根據地となし、尋いて、印度の海岸れよび
錫蘭に商館を建て、マラッカ、瓜哇を略し、進みて支那海に入
り、遂に阿媽港(澳門)を占領して、專此の地に於いて貿易を行ひ
長く東洋の商權を握れり。

西班牙人の東畧

此の頃、西班牙も、東洋貿易の利を占めんと欲し、マゼラン
をして、亞米利加を廻りて、印度に到るの航路を發見せしめ、

基督教の
東漸

百五十六
尋いでデレカスピを遣はして、比律賓群島を占領せしめ、マニラ府を創建し、以て東洋貿易に従事せり。然れども、葡萄牙人のために、既に先鞭を着けられたるを以て、到る所に其の妨害を受けたりき。其の後、和蘭が宗教上の争より、西班牙と分離して、東洋貿易を始むるに及びて、二國の商民は、これがために、忽、壓倒せられたり。

基督教は、唐の時傳來し、後、武宗に排斥せられ、久しく支那に其の跡を絶ちしが、元に至り、復、其の徒を優遇せしより、再行はるゝに至れり。明代に至りては、歐洲は、方に宗教改革の後を受け、殊に、西班牙、葡萄牙の二國の如きは、ゼス・エ・イット派開基の地なるが故に、是等の徒は、歐洲に於いて、失ひし勢力を東洋に得むと欲し、海上の新航路開くると共に、陸續として、東に向ひ、皇紀二千百十九年には、始めて、印度に來り、尋

ザヴィエ
ルの事蹟

百五十七
いで、宣教師、フランシス、ザヴィエルの來りしより、其の傳道盛となり、遂に、我が鹿兒島に來り、平戸、山口、京都等の各地に布教し、後、臥亞に歸り、更に支那に航せしが、途にして、歿せり。次いで、同派のミケル、ローヂヤ、及マテオ、リツチ支那に至り、神宗の許を得て、會堂を立てしより、其の教漸く弘まり、當時、大學士徐光啓の如きも、亦、其の信者たりしといふ。是より傳教師の支那に至るもの漸く多く、ロンゴバルジ、龍華民、アダム、シヤル、湯若望の如き、最、其の名を知られたり。當時、基督教徒は、傳道の傍に、天文曆法等、泰西の學術を輸入せしかば、益、明人の信用を得て、其の支那の文化に貢獻せしこと、少からざるなり。(第十四章と
参照すべし)

第四篇 近世史

第一章 清の開國

清の起

金滅びてより後、通古斯族は、久しく沉淪して復聞ゆるものなかりしが、明の衰ふるに當り、其の族に覺羅部の起るあり、明の神宗の頃、其の部長に努爾哈赤といふものあり、能く兵を用ゐ、傍近の諸部を攻畧して、帝位に上り、後金皇帝と稱す。即、清の太祖是なり。後、遼東を畧して、都を遼陽に定め、尋いで瀋陽奉天府に徙る。其の版圖、北は黒龍江より南は朝鮮に至り、西は遼河より、東は海に及び、滿洲一帯の地、悉、其の有となれり。太祖崩じて、太宗立ち、屢、明の軍を破り、又、蒙古諸部を降し、國號を改めて清と稱せり。其の後、前後二回、朝鮮を攻めて遂にこれを降しぬ。是より、朝鮮は、清の正朔を奉じて、近代に

朝鮮の征

至るまで、藩屬の禮を執れり。(皇紀二二九六年(西紀一六三六年))

太宗崩じて世祖位に即くに當り、既に朝鮮を滅ぼして、東顧の憂なきに至りしかば、叔父睿親王多爾袞をして明を伐たしめ、降將吳三桂の軍を合せて、李自成の軍を破り、北京を陥れ、遂に都を茲に移せり。時に、明の遺臣は、神宗の孫福王を南京に擁立して、中原の恢復を謀りしが、清軍南下して、南京を陥れ、福王を禽にしして、殿に剃髮の令を布き、尋いて各地に、割據せる諸王を降して、殆、支那本部を掃蕩せり。然れども、臺灣には、鄭成功といふもの、魯王を奉じて、尙、明祀を存せり。世祖崩じて、聖祖立ち、康熙と改元せり。故に、これを康熙帝といふ。是より先、世祖の時、明既に滅亡せしが、其の遺族、なほ江南に出没するを以て、清は、其の降將吳三桂を雲南に、尙、可喜を廣東に、耿繼茂を福建に封じ、授くるに、兵馬の大權を以、

支那本土
の統一

てし、これを鎮壓せしむ。然れども、後、其の勢力の強大を憂ひ、聖祖の時に至り、竊にこれが備をなせり。是に於いて、三藩も亦、みづから安んぜず、吳三桂、まづ叛して兵を擧げ、繼茂の子精忠および可喜の子之信相繼ぎて之に應ず。是に於いて、江南一帯、悉、賊の有に歸し、一時、其の勢頗盛なりしが、清軍のこれを討ずるに當り、精忠之信相尋いて清に降り、三桂は、衡州に都して帝號を稱せしに、久しからずして病死し、其の孫世璠立ちて其の衆を領し、雲南府に據りて清軍を拒ぎしが、力盡きて遂に自殺せり。次いで、聖祖は更に水軍を遣はして臺灣を征せしむ。是より先、臺灣に於いては、魯王および鄭成功は既に歿し、成功の子經孫克塽相繼ぎて其の地に據り、明の正朔を奉じて恢復を圖りしが、是に至りて、清に滅ぼされたり。是より、支那は全く、清の領土となれり。

露國の東
侵

魯清の關
係

尼布楚の
條約

清の專、南方を經營するに當り、露西亞は、次第に西北利亞を侵略して清國と境を交ふるに至れり。初、コサク人エルマルクといふもの、シビル汗を破り、其の地を取りてこれを露西亞帝に獻ぜしより、西北利亞の地は始めて露西亞の版圖に入り、爾後、コサク兵をして、ますく、其の内地に侵入せしめ、遂に東してナホツク海岸に出で、雅克薩、尼布楚を取りて、東方侵略の根據地となせり。是に於いて、聖祖は、南方の經略を終ふるに及びて、先、愛琿城を築きて、北邊の防備に當て、尋いで大兵を遣はして、露兵を退けしが、幾ならずして、露兵また來り侵し、かば、聖祖は、露西亞帝ピョートル一世と和を講じ、兩國の使臣尼布楚に相會し、外興安嶺及アルグン河を以て國境と定めき。これを尼布楚の條約といふ。是より、清は、黑龍江沿岸に屯田兵を置きて、此の方面を警戒せしむ。

亞爾泰以東の地清の有となく
圖伯特清の有となく
聖祖の文

北邊すてに定まると同時に、西方また騷擾しければ、聖祖は、更に兵を西方に出して、これが經略を圖れり。是より先、蒙古族の瓦剌部厄魯特といふ西に走り、其の伊犁に居るものを、準噶爾部といふ。清の聖祖の初年、其の部長に噶爾丹ガールダンといふものあり、能く兵を用ゐ、傍近の諸部を侵略して、天山南路を定め、勢に乗じて喀爾喀に侵入す。喀爾喀の兵、大敗して援を清に請ふ。聖祖、乃親征して、遂に噶爾丹を殺せり。是より亞爾泰山以東の地、悉清の有となる。時に、噶爾丹の姪なる策妄阿拉布坦セウアラルブタンといふもの、事を以て、噶爾丹と隙あり。噶爾丹の虚に乗じ、厄魯特厄魯特の全部を併せ、又、圖伯特を犯す。聖祖、よりて兵を發してこれを救ひ、尋いて駐藏大臣を派遣して、圖伯特を鎮せしむ。是より、圖伯特も、また清の版圖に入れり。
聖祖は、斯の如く外に對して大に清の版圖を廣めしのみ

高宗の武功

青海地方清の有となく

ならず、内は文教を盛にして、清國の基業を鞏くせり。殊に帝は學を好み、儒を崇びしより、有名なる學者輩出し、康熙字典、淵鑑類函、佩文韻府等の大編述も、また帝の世に成れり。

第二章 高宗の事業 清人の儒學

聖祖の崩後、世宗セウツウ嗣ぐ。帝の時、青海の酋長叛し、近傍の部落を煽動して清に叛きしが、後、破られて北の方、準噶爾部に投ぜり。是より、青海地方、清の版圖に入れり。青海の餘衆の準噶爾部に走るや、其の部長策妄阿拉布坦セウアラルブタンに據れり。よりて、策妄阿拉布坦は、其の衆を率ゐて清に抗せり。既にして、策妄阿拉布坦死し、其の子噶爾丹策零ガールダンセウゼウ繼ぎ、其の勢ますく、猖獗を極めたり。時に、清は世宗崩じ、其の子高宗位を繼ぐに當り、噶爾丹策令は既に死し、其の孫達瓦齊ダフアチ、其の族阿睦爾撒納アムルサナの援を

得て嗣立せしが、後、これと隙を生じて相闘ぐ。高宗、由りて軍を發し、阿睦爾撒納と共に達瓦齊を夾撃して、これを滅せり。阿睦爾撒納、其の功により部長とならむことを請ひて許されず、清を怨みて又叛す。天山南路の諸豪、これに應ずるもの多し。高宗、乃、兵を發して阿睦爾撒納を攻めてこれを破り、尋いて土豪を平げたり。是より天山南北路は、全く清の版圖に歸せしかば、清の國威、葱嶺以西に振ふに至れり。

清の西方に事を構へし間に、貴州南部の苗蠻の亂を起すあり。是より先、雲南貴州の地は、支那本部中、最晚く清の版圖に歸し、尋いて三柱の亂ありてより、苗蠻の亂を起すこと屢なりければ、高宗は、將を遣はしてこれを討平せり。

尋いて、高宗は、兵を發して緬甸を討せり。此の時に當り、緬甸には、囊籍牙といへるもの起り、阿瓦を復し、犛牛部を征し、

阿撒母を降し、屢雲南の境を犯せり。高宗、よりにて將を遣はして、これを征せしが、囊籍牙の子孟駸、恐れて和を結べり。暹羅は、是より先、皇紀二千二百八十年の頃、ブラチョー、ソンナム位にあり、我が邦人山田長政を用ゐて、日本に通じ、また近隣諸國と戦ひ、國威大に振ひしが、王の死後、内亂起り、長政も害せられ、日暹兩國の通商も隨ひて絶はたり。此の後、暹羅の國勢ますます衰頽し、一時、緬甸に征服せられしが、鄭昭といふもの出でて同志を糾合し、緬甸人を驅逐し、始めて都を磐谷に定めぬ。鄭昭死して次王フヤ、チャクリの時に至り、清に貢し、高宗の封を受けて暹羅國王となれり。即、今の暹羅王家の始祖なり。

是より先、大越すなはち安南には、黎氏王たりしが、宰相鄭氏、世々政を專にし、王は、たゞ空位を守るに過ぎざりき。皇紀

二千二百六十年、廣南に阮廣といふもの自立して王となり、都を順化府に定むるに及び、安南また兩分し、廣南大越對立すること百八十餘年に至る。其の間、廣南は國力旺盛を極め、南方なる占城を破り、尋いて東蒲塞を略し、又我が日本と通商を開けり。皇紀二千四百四十六年、阮文岳、阮文惠の兄弟起り、阮文岳は順化府を陥れ自立して交趾主となり、阮文惠は鄭氏を滅ぼして黎維祁を擁立し、尋いて篡立して東京王となりしかば、黎維祁は救を清に請へり。由りて、高宗は兵を出して阮文惠を討ぜしも、阮文惠の和を請ふに及び、これを許し、且清の封爵を授くるに至れり。(皇紀二四四八年、西紀一七八八年)

此の如く、高宗は、諸方を平定し、境土を廣めたるのみならず、内にありては、學問を獎勵し、大清會典、四庫全書提要等の大編成も、實に帝の時にてありき。

高宗の文績

清人の儒學

清朝の極盛時代

宋以後、性理學盛に起りしが、明末よりの學者は、漸く其の空想にして虚理を談ずるを厭ひ、該博なる考證學を尊ぶの風を生じ、清朝に至りて、其の風益盛となれり。既にして、聖祖高宗の二帝出づるに及び、大に文學を獎勵し、かつ浩漭なる書籍の編述を行ひしより、考證の學いよく、進歩し、顧炎武を始として、幾多の諸大家、前後輩出するに至れり。

抑、聖祖の康熙年間より、高宗の乾隆年間に至る迄は、清朝極盛の時代にして、文武並に隆盛を極めしが、爾後、禍亂相踵ぎて國勢次第に衰ふるに至れり。

第三章 東洋に於ける蘭英諸國の競争

葡萄牙人が、臥亞を根據地となせしより、其の後百餘年間、東洋貿易の主權を握りしも、其の異教徒を強ひて耶蘇教に

改宗せしめ、且又土地の侵略を企てしかば、到る所に排斥を受けたり。西班牙も、曩に比律賓群島を占領し、マニラを以て東洋貿易の中心と定め、近傍の諸國と通商を開かんとせしが、毎に葡萄牙に妨害せられたり。是より先、歐洲大陸には、宗教改革の争亂起り、和蘭の如きは、西班牙に對し、叛旗を翻して、其の羈絆を脱し、主として力を拓地殖民貿易の事業に注ぎ、連に船舶を東洋に派し、和蘭東印度商會を設立し、其の勢力次第に強大となり、葡萄牙、西班牙の商民を驅逐して、錫蘭、マラカスマトラを奪ひ、バタヴィアを建て、根據地となし、臺灣を占領し、我が國および支那と通商せり。殊に其の國民は、新教派にして、ゼス・イ、ト派と相容れざりしかば、其の反目は最甚しかりき。

かく和蘭、葡萄牙の相競争する時に際し、英吉利人も亦、印

度に渡來し、東印度商社を起し、尋いて暹羅、瓜哇等に商館を開き、日本および支那と通商せしが、葡萄牙人に妨げられて、商權を擴張する能はざりき。但、印度に於いては、葡萄牙人の抵抗に勝ち、遂にマドラスを根據とし、西は孟買、東はカルカッタに商館を開きて、盛に通商を營み、更に東進して、我が平戸に來りて貿易を開き、尋いて、支那の廣東、廈門に趣きて通商を試みしが、支那に於いては、葡萄牙人に妨げられ、日本にては、和蘭人に遮られき。然れども、印度に於いては、英國の勢力いよゝゝ増進し、東洋の商權は、葡萄牙人の手を去りて、和蘭人と英國人との競争となれり。

是の時に當り、丁抹も亦、船舶を東洋に派し、東印度商會を起し、和蘭人に妨げられて、志を達せず。佛蘭西も亦、此の頃、印度に渡來し、東印度商社を建て、ボンヂチエリーを以て

其の根據となし、英人と其の商權を争へり。當時、歐洲には、英國王位相續の亂起り、英佛二國の和好破れし時なるを以て、印度に於ける兩國国民も、亦、烈しく衝突したりき。然るに、佛蘭西のボンヂチエリーの總督ジュブレイといふもの、大に勢力を得て、マドラスの英人を壓倒せしが、久しからずして、英國東印度商社の書記にクライヴといふもの出て、佛軍および印度副王の兵と戦ひて、連に之を破り、遂にボンヂチエリーを陥れ、又、蘭領を畧取せり。然るに、佛人はベンガル副王の後援を得て、英人と争ひしが、クライヴ又これを破り、ガルカッタ附近の地は、英人の手に落ちたり。其の後、印度に内亂ある毎に、英人はこれに干涉し、漸次、各地の收稅權を納めしかば、幾ならずして、恒河流域の實權は、英人の手に歸じたり。尋いて、ヘスチング代りて、印度の總督となるに及び、諸般の

改良を行ひ、且、連に土地を攻略して、英國の勢力を扶植すること力をめたり。此の頃、莫臥兒帝國は全く衰頽し、マラーター同盟、其の實權を握りしが、會、阿富汗人アーマード自立して、波斯の羈絆を脱し、印度に侵入し、マラーター同盟を破りて、莫臥兒帝を擁立して、北印度に號令せしが、アーマードの死後、内亂ありて、亦、印度を顧みるを得ず。是に於いて、莫臥兒は四分五裂して、統一を失ふ。英人、乃、これに乗じて、莫臥兒帝を擁し、マラーターを平定し、尋いて、西北印度に割據せる回教徒を降し、遂に全印度を統一せり。(皇紀二五〇九年)然るに、印度の副王および國民等は、深く英人の專横を憤り、莫臥兒帝を推戴して、叛旗を擧げしが、英の總督カンニングは、能くこれを討平し、遂に莫臥兒帝を廢して、緬甸に幽せり。アクバル帝の建國より此に至るまで、三百二年とす。(皇紀二五三七年)

年七)尋いで、英國は東印度商社の政權を收め、英國女王ウィクトリアは、印度女皇の尊號を稱するに至れり。
 かくて、英國は、印度を經略し、更に緬甸を占領せむとし、遂に事を構へてこれを占領せり。(皇紀二五四五年)是より先、緬甸は、ポドイアラ王位に即き、阿臘干を畧し、暹羅を伐ち、尋いで、アッサムを征し、勢に乗じてベンガルに侵入す。アッサム王、由りて援を英國に假り、緬甸を破りしかば、遂に土地を割き償金を出して、英國と和を講ぜしが、緬人は、なほ英人を蔑視して、通商條約に背くことありしかば、英軍また來り攻め、毘牛およびマルタハン(西紀一八五二年)を占領せり。(皇紀一八五二年)既にしてポドイアラ崩じて、チーボー位に即き、驕暴にして政を修めず、重税を英國に課せむとして、英國との平和破れ、英軍は遂にマンダレーを陥れ、チーボーを擒にし、其の地を舉

げて英領印度の屬邦となせり。(皇紀二五四六年)

第四章 清英の交渉

清英の交渉

印度に於て、英國の勢威盛に赴くと同時に、支那との通商も、從て盛大に赴くに至れり。當時、英人が清國に輸出する重なる貿易品は、鴉片にして、其の害毒甚しかりしかば、高宗の孫宣宗の時に至り、林則徐を兩廣の總督に任じ、其の輸入を禁ぜしめたり。是に於いて、林則徐は、外商に逼り、其の所有の鴉片を出さしめ、悉くこれを燒棄せしが、なほ密賣を企つる英商ありければ、遂に全く英國との貿易を禁ずるに至れり。是に於いて、英將フレンマンは、軍艦十五隻を率ゐて來侵し、舟山列島を占領し、廣東、廈門、寧波の諸港を封鎖す。宣宗、由りて各地の兵備を撤し、以て和を講ぜしも、議諧はずして、英艦は

香港の割讓

更に廣東、厦門、定海等を陥れしかば、清國は遂に止むことを得ず、使臣を南京に遣はして和議を結ばしめ、香港を英國に割讓し、上海、寧波、福州、厦門、廣東の五港を開き、かつ償金二千一百萬兩を出すこととせり。これを鴉片戦争といふ。(皇紀一八四二年)

長髮賊の亂

鴉片戦争後、幾ならずして、清國には内憂外患とも起りて、ますます衰頽に赴くに至れり。是より先、聖祖および高宗の時、外征を事とせしより、國庫匱しく、從て賦歛漸く重かりしが、鴉片戦争の後に至りて益甚し。これに加ふるに、兩廣の地大に饑え、盜賊所在に蜂起せしかば、是に至り、洪秀全といふもの出て、耶穌教に附會し、みづから天帝の次子と稱し、其の信徒を驅りて、兵を廣西に起し、みづから太平天國王と稱す。其の勢頗る猖獗なり。其の徒みな清俗を棄て、髮を

アロー號事件

奮ふ。故に稱して長髮賊といふ。時に、宣宗崩じて、文宗立ちしが、州郡大率賊の攻畧を受けたり。文宗由りて天下に詔して、勤王の兵を募りしかば、曾國藩これに應じて、湖南を恢復し、尋いて、胡林翼、李鴻章等も亦、兵を起して、賊軍を討せしも、賊勢は依然として猖獗を極めたり。かく、清國は内亂に苦しむの時に當りて、更に英佛連合の軍と戦ふに至れり。初、鴉片戦争起りて以來、外人の交通頻繁となるに従ひ、長髮賊の外船に投じて、追捕を逃る者多し。會、英國の商船アロー號に、長髮賊の投ずるものありしかば、清國官吏は、其の許諾を俟たずして、擅に其の船中を搜索せしに、香港の領事パークスは、之を以て英國の國旗を辱むるものとなし、廣東總督に訴へしも、其の要領を得ず。又、此の頃、佛國の宣教師も、廣西に於いて、清民に殺害せられしかば、英

佛二國は是に於いて相連合して廣東を陥れ、更に北上して天津に逼る。清國は止むを得ず、天津に於いて和議を結び、翌年兩國の使臣は、批准條約を交換せむがために、軍艦に乗じて太沽に至りしを、清國砲臺は、不意にこれを砲撃せしかば、二國は大に清國の不信を怒り、再、戦艦を連ねて太沽を陥れ、天津を破り、進みて北京を陥れたり。是に於いて、文宗は、熱河(直隸省)に出奔し、恭親王を遣りて和を求め、北京駐在の露國公使も亦、其の間に立ちて調停せしかば、和議遂に成り、清國は千八百萬兩の償金を出し、嘗て開きし五港の外、更に牛莊等の港を開き、二國の公使および領事を派遣すること、耶蘇教公布の自由を與ふる事とを約せり。これを北京條約といふ。(皇紀二五二〇年)
(西紀一八六〇年)

清國既に外國との葛藤を絶ちしかば、是より力を内亂の

鎮定に專にするを得たり。既にして文宗崩じ、穆宗立つに及び、米人華爾特、英人戈爾登等、清軍を助けて、賊徒を征せしかば、是より賊の兵氣漸く挫け、幾もなくして賊軍内訌を生じ、驍將石達開等多く獲られ、金陵遂に陥り、賊魁洪秀全、勢窮まりて自殺し、餘黨遂に平ぐ。亂起りしより、茲に至る十六年、賊の侵掠を蒙むる所十六省に及べり。(皇紀二五二四年)
(西紀一八六四年)

第五章 露人の東畧

露西亞の東方經畧は、是より先、厄布楚の條約によりて頓挫せしが、其の後、清が外蒙古および天山北路を平定して、西比利亞との交通盛なるに及び、露國は更に清國と恰克圖條約を結び、恰克圖を以て兩國の互市場となせり。其の後、露國は、再、東下の策を講じ、東部西比利亞の總督ムラヴ、ヨウは、連

浦羅斯德
の建設

露國の中
央亞細亞
經畧

に侵畧を企て、黒龍江を下りて、其の河口にニコライスク港を建て、尋いて、我が樺太の北部を占領し、又、清が長髮賊の内亂に苦めるに乗じて、國界改定の議を迫り、愛琿條約を締結して、黒龍江北の地を割き、烏蘇里江東岸の地を兩國共有の地となし、松花江、烏蘇里江の通航權を得たり。既にして英佛同盟軍が北京を陥るゝに當り、露國公使イグナチーフは、講和の事に斡旋せしを以て、其の報酬として、烏蘇里江東の地を割かしめ、浦羅斯德を建設せり。

露國は、かくの如く、極東に於いて、大に其の領土を擴張せしのみならず、又、中央亞細亞に地を略して南下せむとせり。是より先、露帝ピョートルの時に、ボハラの經略に従事せしが、土人の反抗に逢ひて成らず、其の後久しく顧みざりしが、是に至り、再、中央亞細亞の經畧を企て、益、南侵の勢を逞しく

伊犁の紛
争

し、サマルカンドを收め、ボハラを保護國となし、キワを降し、遂にコーカンドを滅し、悉、西土耳其斯坦の地を征服し、遂に清の伊犁と堺を接するに至れり。其の後、露國は、此の地方に回教徒の叛亂あるに乗じ、遂にこれを占領するに至れり。是より先、清の天山南路を定むるや、其の地の回教徒を虐待せしかば、回教徒怒りて亂を起し、尋いて、喀什噶爾人阿古柏といふもの、兵を擧げて叛し、殆、天山南路を一統せり。時に、清は、穆宗既に崩じ、今帝嗣ぎて立ち、左宗棠を遣はしてこれを鎮定せしめ、更に露國に向ひて、其の占領せる伊犁の還附を請求し、崇厚を遣りて、リフチヤ條約を訂結せしめしが、清に不利の點多かりしを以て、之を廢棄し、更に曾紀澤を遣はし、コルゴス河以西の地を露國に割讓し、償金九百萬、ルーブルを支辨することを約して、遂に局を結びぬ。

皇紀二五四一年
西紀一八八一年

第六章 安南暹羅 清佛の關係

伊犁の紛議の局を結びし後、幾もなくして、安南の事より、清と佛國との間に衝突を生ずるに至れり。是より先、安南の阮福映といふもの、佛國の宣教師に頼り、兵を佛國に假り、交趾を取り、柴棍に據る。後、其の勢次第に強大となり、上中交趾を取り、順化を復し、東京を陥れ、遂に阮文惠の子孫を滅ぼして、安南を一統し、清の封冊を受けて越南王となる。然るに、阮福映の越南王となるや、佛國に對して前約を履まず、却りて、屢佛國の宣教師を虐待せしかば、佛國は、遂に安南侵畧の意を決し、東京地方の叛亂あるに乗じ、柴棍を占領せり。時に阮福映の孫、阮弘智位にありしが、これを防ぐ能はず、全く柴棍を割讓し、償金二千萬法を出して和を請へり。佛國は、是より

安南の一統
安南と佛國との關係

柴棍を根據地となし、尋いてカンボチャを保護國となし、更に越南王に逼りて、基督教の公布と紅河の航行權とを認めしめ、遂に擅に河内海防に兵を置く。是に於いて、越南王は、佛人の專横を怒り、長髮賊の殘將劉永福を引きて、佛人を攘はしむ。然るに、佛の海陸軍は、直に安南に侵入し、國都順化府を陥れしかば、越南王は、東京地方を讓與し、且、佛國の保護國たることを約して和を結べり。

是より先、阮氏の越南國を建つるや、清の封冊を受けて王たりしが故に、是に至り、清國異議を唱へしも、其の効なく、遂に安南の主權を放棄せり。よりて、佛軍は、條約履行のため、諒山の鎮臺を占領せむとして、清國の兵と衝突し、多く死傷せしかば、遂に兩國の戰端啓け、佛將チゴールは、陸軍を率ゐる諒山を占領し、クルーペーは、海軍を率ゐて、福州の沿海に戰

清佛兩國の衝突

ひ、清國の福建艦隊を撃沈し、澎湖島を占領し、又、臺灣の諸港を封鎖せり。然るに、佛國に於いては、内閣の交迭ありて、外征の方針一變し、尋いてクールベールも病死せしかば、兩國は遂に天津の條約を以て和を結び、越南を以て佛國の保護國となし、且、佛國の東京を領有することを承認せり。

暹羅は、是より先、まばく、越南と争ひしが、コングート王の時に至り、專、開國の方針を採りて、英佛諸國と通商條約を結び、尋いて、今王チュロロンヌルン賢君にして、連に歐米の文化を輸入して、内治の改良を圖り、我が日本とも、修交條約を結ぶに至れり。然れども、近時佛國の威迫を蒙り、眉公河東の地を失ふに至れり。(皇紀二五五三年 西紀一八九三年)

第七章 日清韓の關係 征清の役

維新以後、我が國は、益、開國の方針を取り、明治二年(皇紀二八七六年)始めて清と修交條約を結び、尋いて、我が國および清國に藩屬せる琉球を封冊して、其の外交を處置せしが、會、臺灣の生蕃が、琉球および備中の漂民を殺害せしより、日本政府は、副島種臣を清國に遣はして、其の罪を問ひしに、清國は、臺灣を以て化外の民なりと稱して、應ぜざりしかば、我が國は、西郷従道を總督として、臺灣を征討して、これを占領せしめたり。然るに、清は、遽に異議を唱へて、撤兵を要求せしかば、更に大久保利通を清國に遣はして、談判を開かしめ、英國公使の調停により、遂に償金五十萬兩を出さしめ、和議を結べり。(皇紀二五三四年 西紀一八七四年)尋いて、我が政府が琉球王を廢して、沖繩縣を置くに及びて、清國は、また異議を唱へ、兩國の感情漸く背馳するに至れり。

朝鮮は清の太宗に征服せられしより、歴世其の冊封を受け、殆、これに隸屬せしが、又、我が國に對しても隣交を修し、將軍の禪代毎に來聘するを例とせり。然るに、維新以後、我が國は、朝鮮に書を贈りて舊好を紹がんとせしが、時に、今帝李熙、年なほ幼にして、其の父李昰應君大院政を攝し、固く鎖國主義を執りて、これを聽かざりき。既にして我が軍艦雲揚號を江華灣に砲撃せしかば、我が政府は、黒田清隆、井上馨を遣はして、其の罪を問はしめ、且、修交の事を嚴談せしめたり。是に於いて、朝鮮は、其の罪を陳謝して、始めて修交の約を結び、釜山、元山、仁川の三港を開きたり。是より、歐米の諸國も、朝鮮の獨立國たるを認め、我が國の例に倣ひて通商條約を締結するに至れり。(皇紀二五三六年)既にして、王、年長じて政を親するに及び、皇后閔氏、政に與り、其の一族も、顯要に列して政を擅

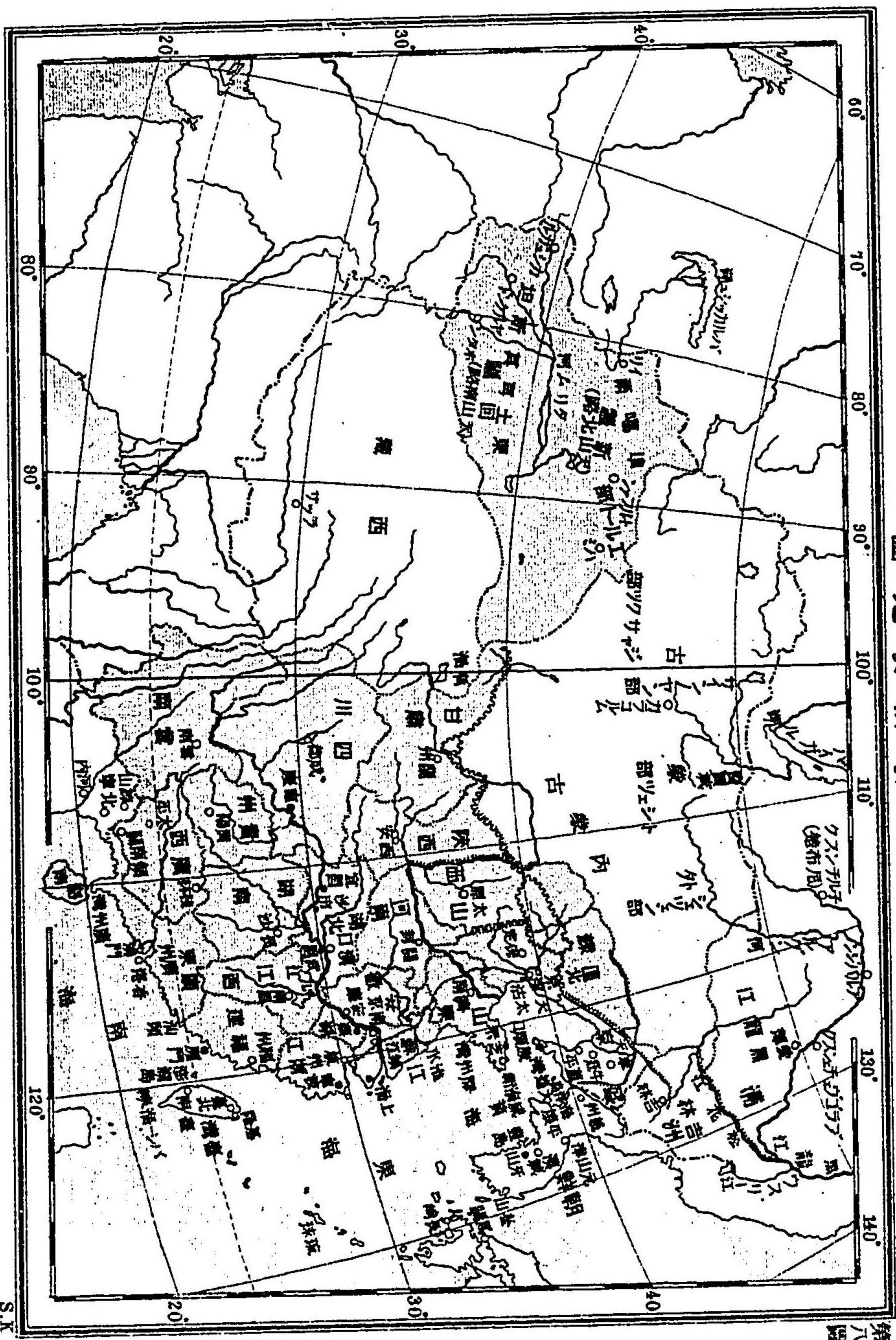
にせしかば、李昰應之を喜ばず、よりて、竊に京城の鎮兵を煽動して、閔氏の一族を撃ち、勢に乗じて我が公使館を襲撃せしかば、我が國は、井上馨を遣はして、其の罪を問ひ、且、爾後、公使館に護衛兵を駐屯せしむべきことを約しぬ。是に於いて、清國も亦、兵を朝鮮に派して、其の公使館を護衛せり。此の時に當りて、朝鮮には、獨立事大の二黨派ありて相軋轢し、事大黨は、清國に頼りて其の國を維持せんとし、外戚閔氏の一族これを率ゐ、獨立黨は、我が日本によりて獨立の體面を保たんとし、金玉均、朴泳孝の徒、これが領袖たり。かくて我が明治十七年(皇紀一八八四年)に至り、獨立黨急に發して、事大黨の領袖を殺し、國王を擁して我が公使に頼りしかば、清兵も亦、事大黨を助け、遂に我が公使館を焼けり。是に於いて、我が國は、井上馨を朝鮮に遣はして、償金を出さしめ、更に伊藤博文

天津條約

を清國に遣して、李鴻章と天津に會見せしめ、兩國共に其の駐在兵を撤し、爾後若兵を朝鮮に出すときは、必先互に相通知すべきことを約せり。これを天津條約といふ。

既にして我が明治二十七年（皇紀二五五四年）に至り、朝鮮の南部に東學黨と稱する暴徒起り、其の勢漸く盛なるに及び、朝鮮は、援兵を清に假りしかば、我が國も亦兵を出して居留民を保護し、尋いて、清國と共に、力を協せて、朝鮮の内政を改良せむとせしに、清國は、これに應ぜず、剩、天津條約を無視して、我に撤兵を要求せしかば、兩國の平和遂に破れ、我が軍は、豐嶋沖、牙山に敵の海陸軍を破り、進みて平壤を拒守せる清兵を撃破し、鴨綠江を渡りて、盛京省に侵入せり。又、我が海軍は、清國の北洋艦隊を海洋島附近に撃破し、尋いて、我が陸軍は、更に遼東半島に上陸せしかば、旅順港、威海衛相尋いて

清朝要地圖

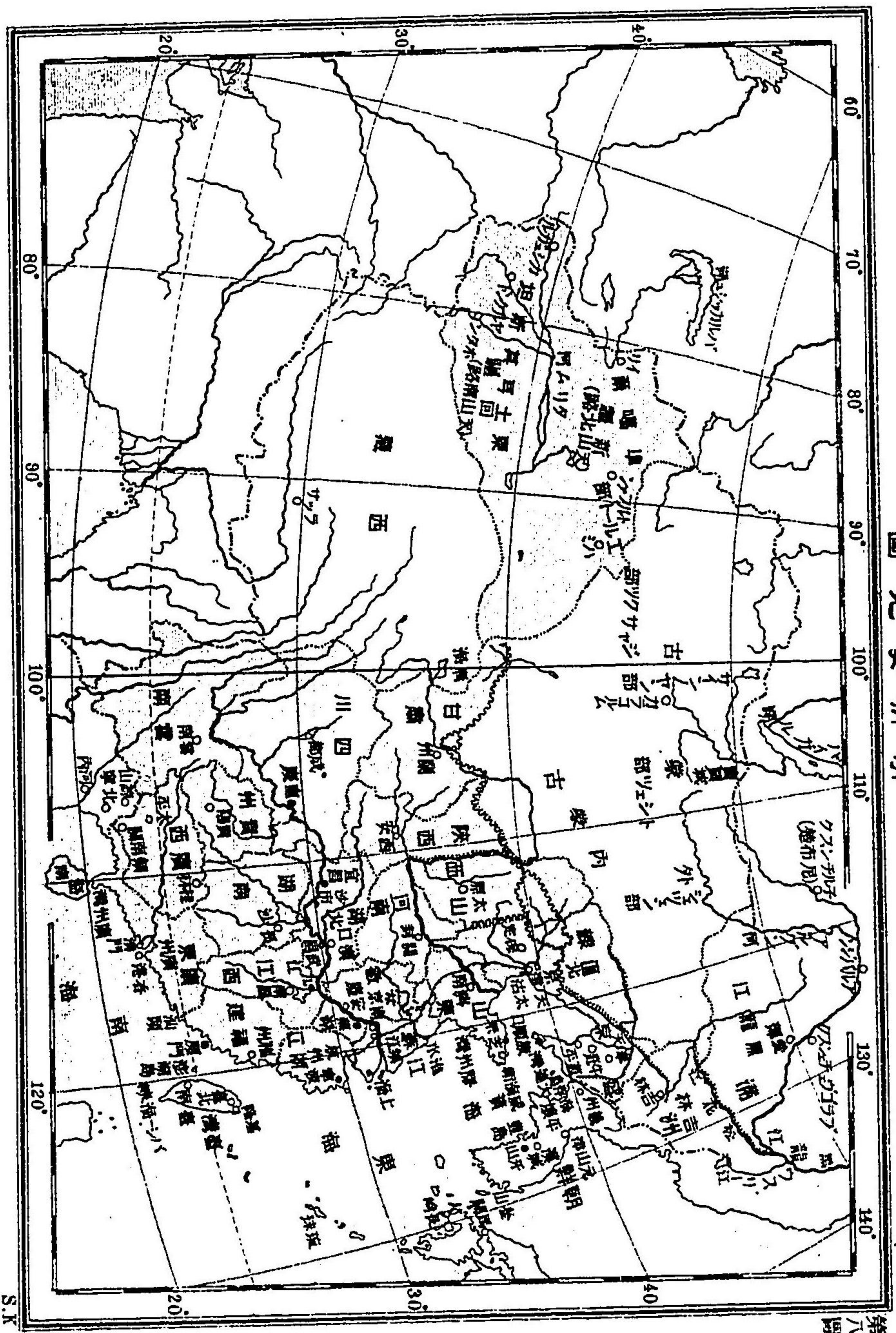


第六圖

天津條約

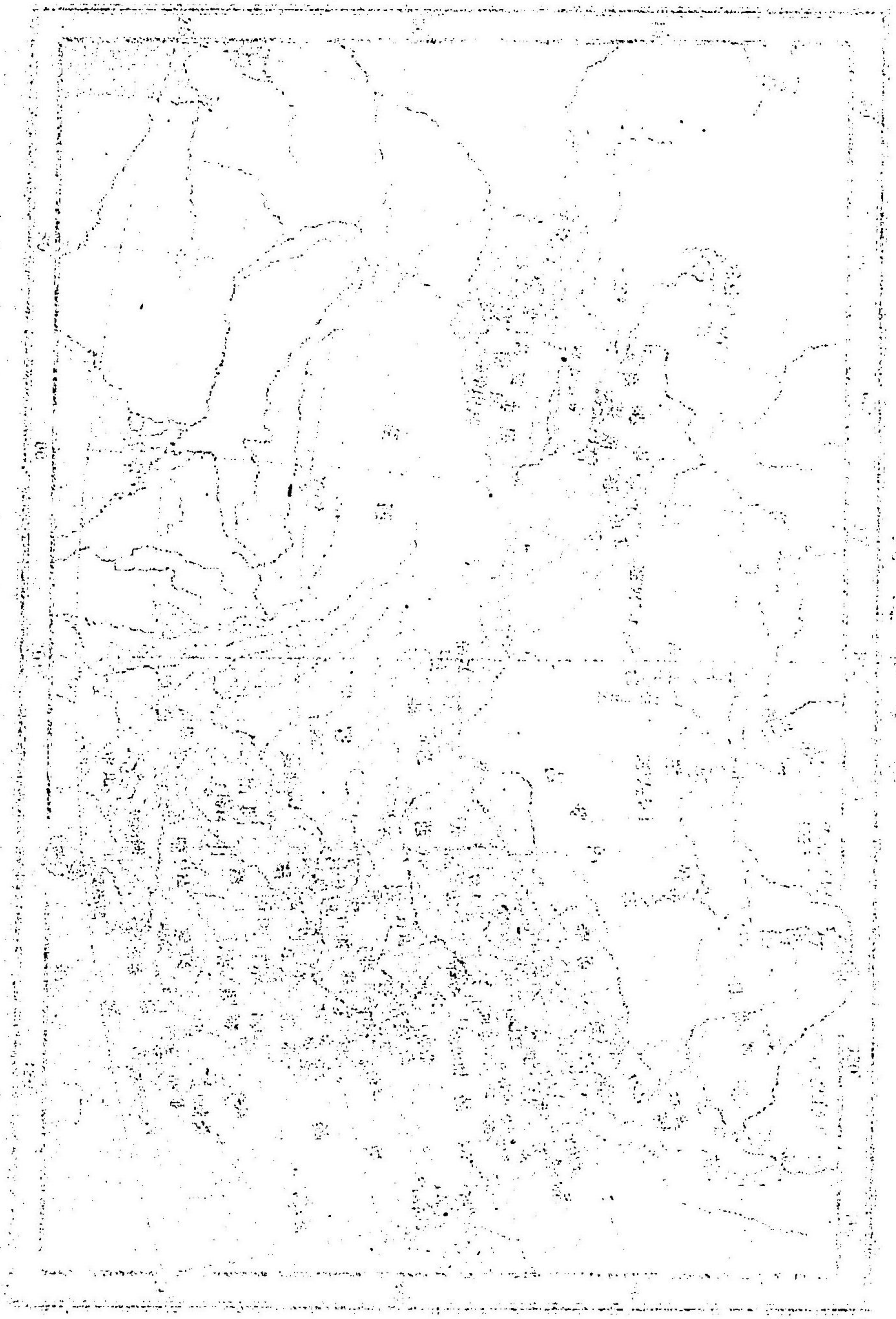
を清國に遣して、李鴻章と天津に會見せしめ、兩國共に其の駐在兵を撤し、爾後、若、兵を朝鮮に出すときは、必、先、互に相通知すべきことを約せり。これを天津條約といふ。

既にして我が明治二十七年（西紀一八九五四年）に至り、朝鮮の南部に東學黨と稱する暴徒起り、其の勢漸く盛なるに及び、朝鮮は、援兵を清に假りしかば、我が國も亦、兵を出して居留民を保護し、尋いて、清國と共に、力を協せて、朝鮮の内政を改良せむとせしに、清國は、これに應ぜず、剩、天津條約を無視して、我に撤兵を要求せしかば、兩國の平和遂に破れ、我が軍は、豐嶋沖、牙山に敵の海陸軍を破り、進みて平壤を拒守せる清兵を撃破し、鴨綠江を渡りて盛京省に侵入せり。又、我が海軍は、清國の北洋艦隊を海洋島附近に撃破し、尋いて我が陸軍は更に遼東半島に上陸せしかば、旅順港、威海衛相尋いて



清朝要地圖

第八圖



陥り、北洋艦隊遂に全滅せり。これと同時に、別軍は南方に向
ひて澎湖島を占領し、勢威更に南方を壓せしかば、清國遂に
力竭きて和を請ひ、李鴻章を全權大臣となし、日本に遣はし
しかば、我が邦は、伊藤博文、陸奥宗光をして、これと馬關に會
見して、媾和條約を結ばしめ、朝鮮の獨立を確認し、償金貳億
兩を納れ、遼東半島、臺灣、澎湖島を割き、沙市、重慶、蘇州、杭州の
四港を開くことを約す。然るに、露獨佛の三國は、日本が遼東
半島を永久に占領するは、東洋の平和に害あるを口實とし、
我が邦に勸告するに、其の還附を以てせしかば、我が邦は、深
く時勢の非なるを察し、其の勸告を容れ、別に其の代償とし
て三千萬兩を納れしめ、遂にこれを清國に還附せり。(皇紀二
五五五年)

年西紀一
八九五年

第八章 東洋に於ける最近事件

清國の敗北は、實に支那の弱點を世界に暴露せしのみならず、殊に敗滅の後、兵備全く缺けて、能く爲すとなきを示すに至りしかば、歐洲の諸國は、これに乗じて其の利益を獲得せむと企つるもの相繼ぎて起るに至れり。日清戦後、幾ならずして、佛國は、清國より東京境界改正の利益を受け、又、東京鐵道の延長および廣東、廣西、雲南の三省に於ける鑛山開掘の特權を收得したり。尋いて、我が明治三十年、獨逸の宣教師が山東省に於いて清人に殺害せらるゝや、獨逸は、これを口實とし、其の艦隊は急に膠州灣を占領し、清廷に要求せしかば、清廷は遂にこれを容れ、膠州灣は、向後九十九年を期限として獨逸に貸與するに至りぬ。

尋いて、英國は、清廷に逼り、揚子江沿岸地方をば、今後いつ

佛國の要

獨逸の要

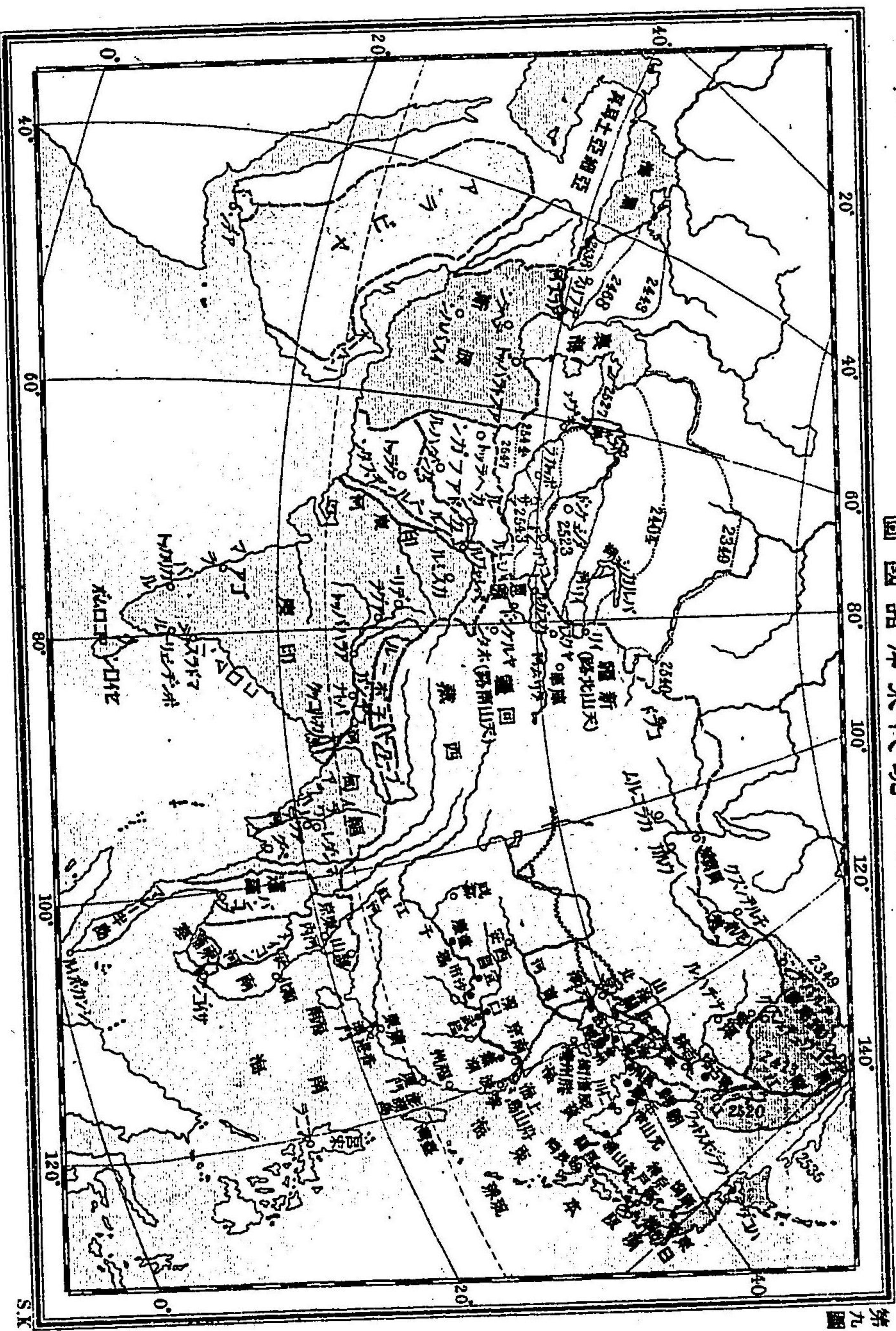
露國の要

英國の要

れの邦國にも、貸與或は割讓せざることを誓はしめむことを請求せしが、幾もなくして其の條約もまた成れり。是に於いて、露國は、更に旅順港、大連灣の借入及び滿洲鐵道敷設等に關する要求を提出し、佛國も、次ぎて廣州灣の借入および東京鐵道の再延長に關する要求を提出して、おのゝ清廷に迫りければ、清廷は已むことを得ず、旅順港、大連灣を二十五年間露國に貸與するを許し、英國は、露國との勢力の平均を保たむがために、威海衛借入の事を要請せしが、清廷は、これを拒むことを得ず、威海衛、廣州灣も亦、各二十五年の期限を以て貸與せられたり。これと同時に、東京鐵道を雲南府まで延長すること、廣東、廣西、雲南の三省を他國に割讓せざることの條約も、亦、佛國との間に成りき。これに次ぎて、我が邦も、福建省を他國に割讓せざることを清國に誓はし

義和團の
 起
 連合軍北
 京に入る
 清國及東
 洋諸國の
 形勢

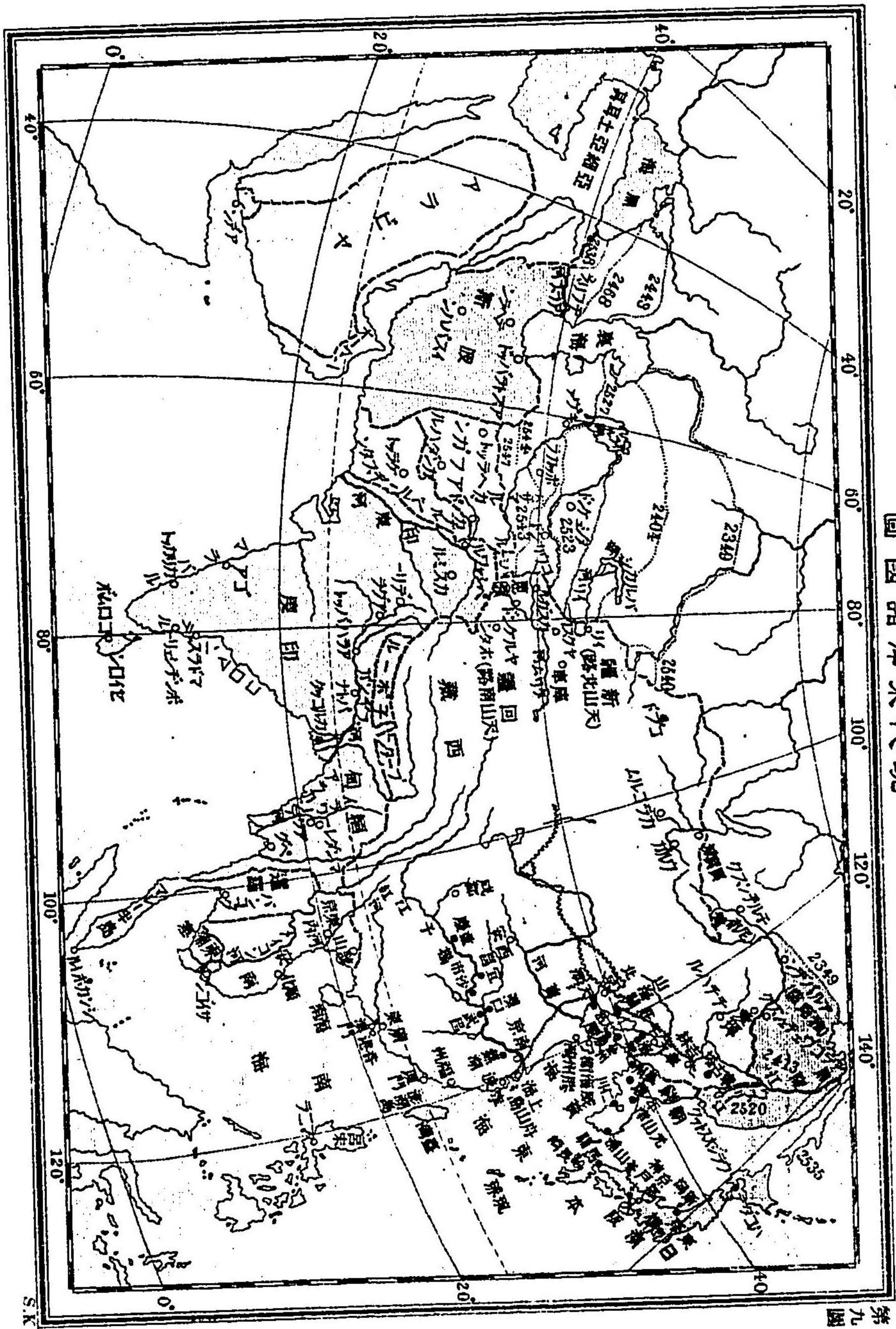
めたり。其の後、伊太利も亦、地を清國に得むとして、巧に口實を設けて要求することありしが、遂に其の目的を果さずして已めり。既にして、我が明治三十三年に至り、清國に義和團と稱する暴徒起り、耶蘇教を排斥し、教會を破壊し、外國人を殘殺し、遂に北京に入り、公使館を合圍せり。是に於いて、我が國は、英米露獨佛の諸國と共に、連合軍を組織し、太沽を略し、天津城を陥れ、進みて北京に入り、僅に公使を救援することを得しが、清帝は既に奔竄し、形勢いよゝ切迫して、今後の形勢測られざるものあり。清國の國情、夫れ既に此の如し。其の他、東洋の諸國を見るに、印度、緬甸、安南の諸國は、外人の羈絆を受けたること既に久しく、其の能く獨立の體面を保つものは、我が國の外、朝鮮、暹羅の二邦あれども、其の勢力微弱にして、常に列強のために覬覦せらるゝを見る。嗚呼、吾人東



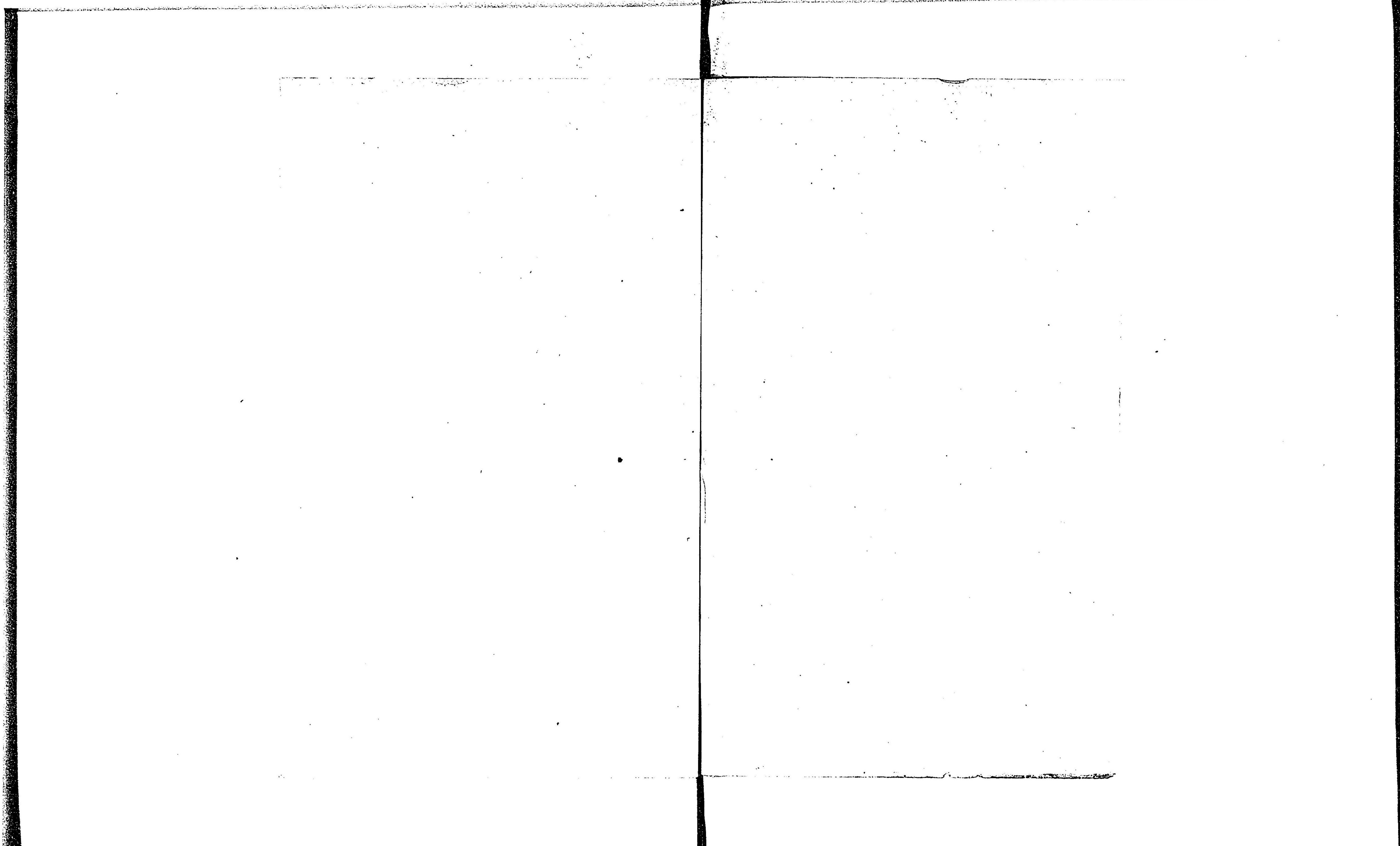
東洋諸國現狀圖

義和團の
 起
 連合軍北
 京に入る
 清國及東
 洋諸國の
 形勢

めたり。其の後、伊太利も亦、地を清國に得むとして、巧に口實を設けて要求することありしが、遂に其の目的を果さずして已めり。既にして、我が明治三十三年に至り、清國に義和團と稱する暴徒起り、耶蘇教を排斥し、教會を破壊し、外國人を殘殺し、遂に北京に入り、公使館を合圍せり。是に於いて、我が國は、英米露獨佛の諸國と共に、連合軍を組織し、太沽を略し、天津城を陥れ、進みて北京に入り、僅に公使を救援することを得しが、清帝は既に奔竄し、形勢いよゝ切迫して、今後の形勢測られざるものあり。清國の國情、夫れ既に此の如し。其の他、東洋の諸國を見るに、印度、緬甸、安南の諸國は、外人の羈絆を受けたること既に久しく、其の能く獨立の體面を保つものは、我が國の外、朝鮮、暹羅の二邦あれども、其の勢力微弱にして、常に列強のために覬覦せらるゝを見る。嗚呼、吾人東



東洋諸國現狀圖



洋に國するもの、豈發憤戒悟せざるべけんや。

中
東洋史要
大尾

明治三十四年二月一日印
 明治三十四年五月十日再發行
 明治三十四年八月十日訂正三版印刷
 明治三十四年八月十五日全發行

○定價金七十五錢

不許複製

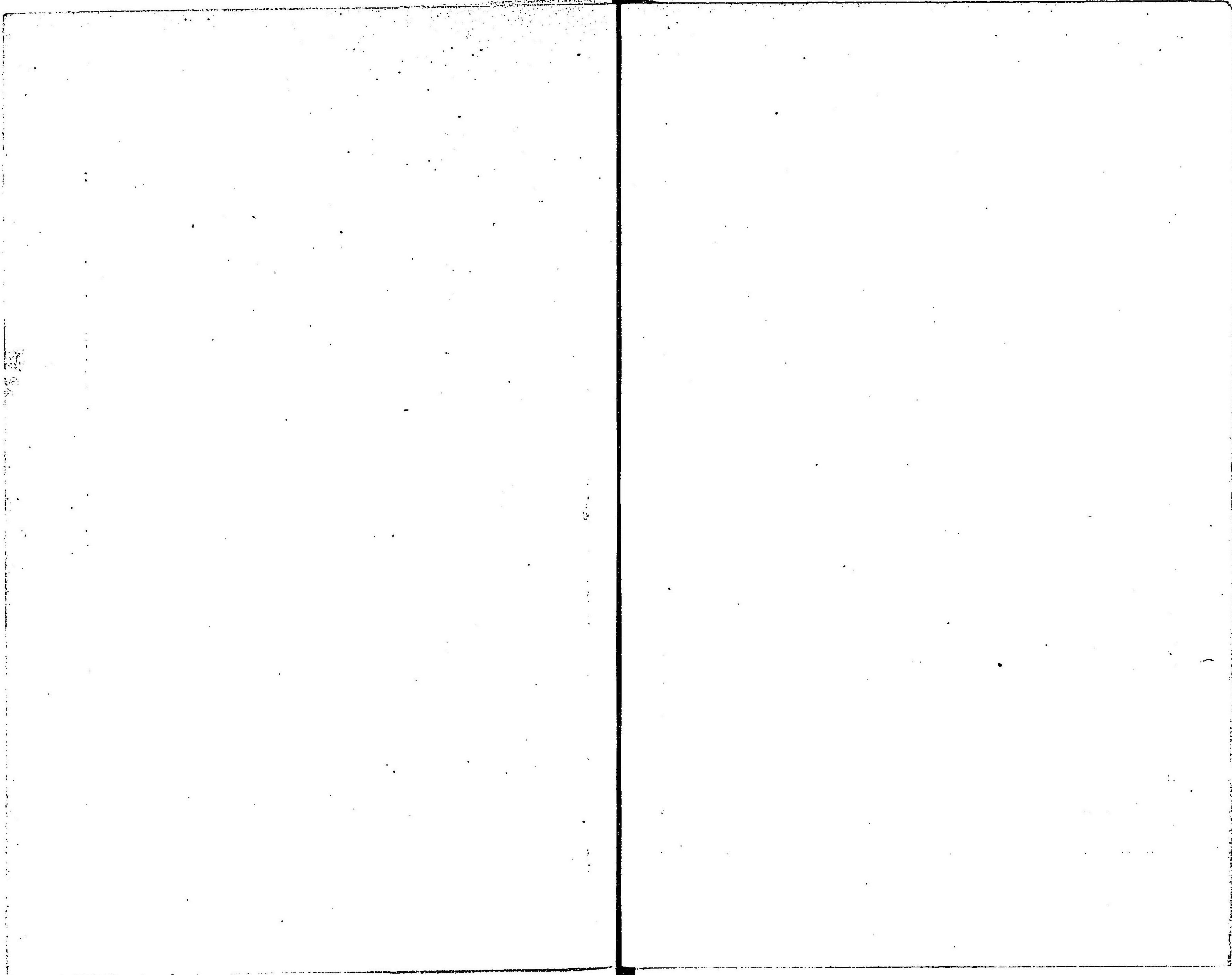
著者 沼田 賴輔
東京市小石川區原町百十九番地

發行者 三樹 一平
東京市神田區錦町一丁目十番地

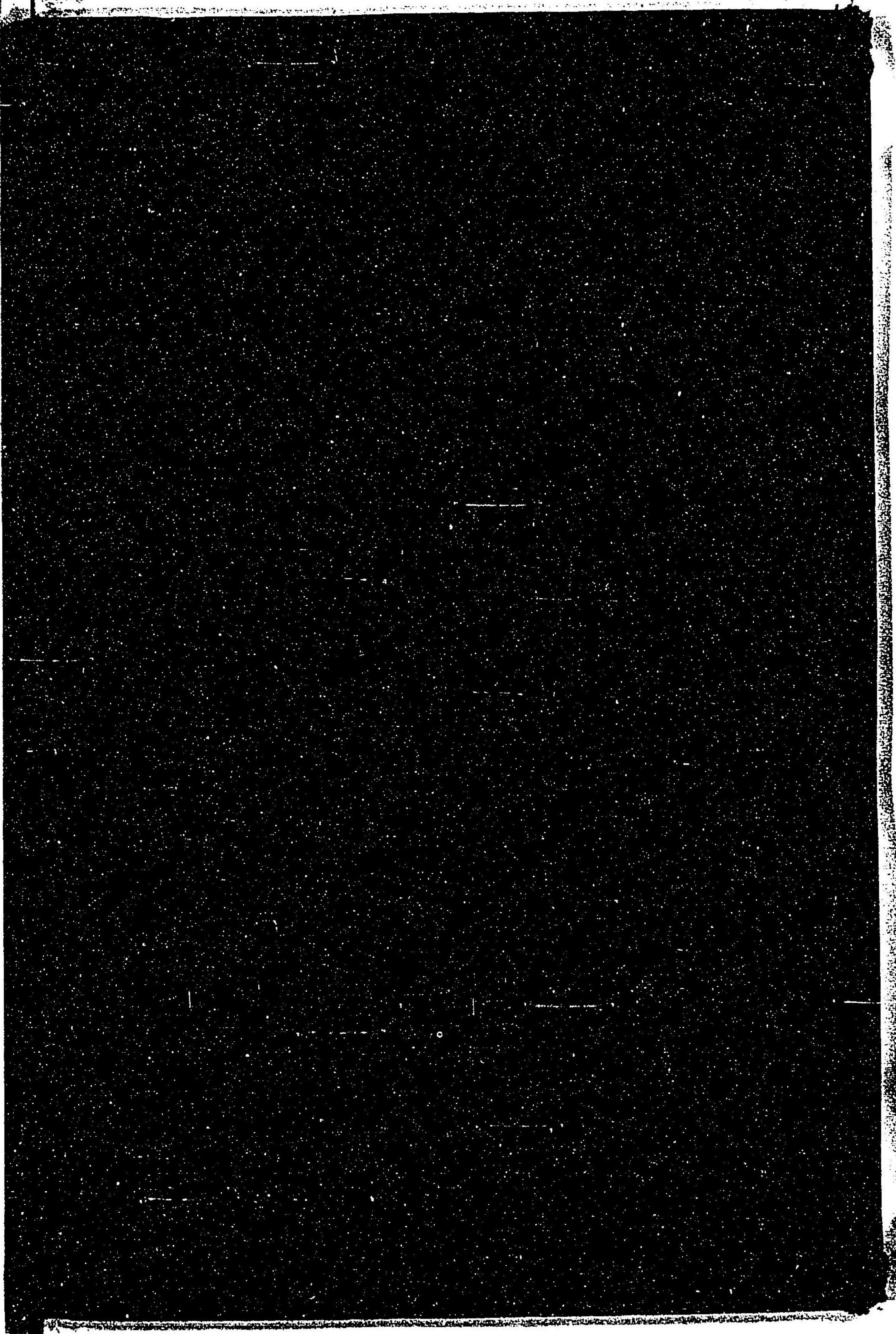
印刷者 白土 幸力
東京市神田區美土代町二丁目一番地

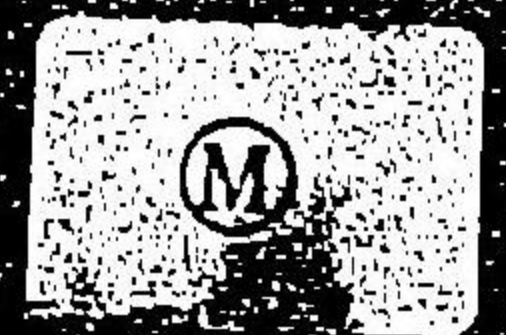
印刷所 三光 堂
東京市神田區美土代町二丁目一番地

發行所 東京市神田區錦町一丁目 明治書院
大坂市東區備後町四丁目 關西大賣捌
 吉岡平助



90
47





003303-000-8

90-47

中学東洋史要

沼田 頼輔 / 著

M34

ACC-1726



